

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北米におけるイヌイトおよびユツピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について：
1984年から1993年にかけて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5790

北米におけるイヌイトおよびユピックに関する文化人類学的研究の最近の動向と現状について： 1984年から1993年にかけて

岸 上 伸 啓

1. はじめに
2. イヌイトおよびユピックの歴史と現状の概観
3. 北米における研究動向
 - ① 研究史の概略と1983年までの研究動向
 - ② 最近の動向と現状
 1. 研究主題
 2. 研究地域
 3. 研究者と研究教育機関
4. 社会変動と生業の研究：理論と応用
 - ① 社会変動研究
 - ② 生業研究
5. 検 討

1. はじめに

世界に存在する狩猟採集民に関する文化人類学的研究は、この10年の間に大きな曲り角を迎えている。1980年代の前半から狩猟採集民の研究は、最適採資源理論 (optimal foraging theory) の適用によって新たな生態学的アプローチの時代を迎えた。また、ほぼ同時期に、アフリカのサンらこれまで所与の環境に適応してきたとされる狩猟採集民についての生態学的な研究に対する批判が、考古学者や文化人類学者から起こり、世界システム理論 (Wallerstein 1974) や従属理論 (Frank 1971) に基づく狩猟採集民モデルが提起され、いわゆるブッシュマン論争が発生した (Denbow 1986, Schrire ed. 1984, Schrire 1980, Solway and Lee 1990, Headland and Reid 1989, Lee 1992, Wilmsen and Denbow 1990; Wilmsen

1983)。かかる意味で狩猟採集民研究は、活況を呈していると言っても過言ではない。

しかしながら、E. バーチ (Burch 1994) は、過去30年を振り返り、現在の狩猟採集民研究が、現実的な問題、方法論的な問題および概念の問題の3つの大問題に直面していることを指摘している。現実的な問題とは、研究対象であるいわゆる狩猟採集民社会が消滅しつつあるという現実の問題である。方法論的な問題とは、普遍論者と歴史的個別主義者との間で争点となっているものであり、狩猟採集民の一般理論の構築が現在の狩猟採集民を研究することによってはたしてどの程度、可能かという問題である。そして概念の問題とは、カナダのイヌイット、オーストラリア先住民やカナダ北西海岸インディアンのトリンギットなどのように狩猟採集民にはかなりの多様性がみられるが、それを一括する狩猟採集民という概念がはたして学問的に意味のあるカテゴリーであるのかという問題である。この最後の問題に関しては、マイヤース (Myers 1988) やフェイト (Feit 1994) も狩猟採集民の社会は、独自の属性をもつカテゴリーではないとの見解を表明している。現在の狩猟採集民社会研究は、これらの問題と直面しており、これら3つの問題のうちどれをとっても狩猟採集民研究の存在意義を否定するに十分な理由となりうるということが明らかにされている (Burch 1994)。

ところで、極北の民であるイヌイット (Inuit) やユピック (Yup'ik) などの極北民族 (注1) についての文化人類学的研究にはどのような傾向がみられ、その研究の現状はどのようなものであろうか。この論文では、過去10年に北米で行なわれた極北研究の動向と現状を吟味することにより、研究主題の変化をたどるとともに、研究課題の現状と展望を検討してみたい。なお、紙数の関係上、本論文ではヨーロッパや日本で活躍している極北研究者の研究動向や現状を紹介し、検討することはできないことをあらかじめお断りしておきたい。

2. イヌイットおよびユピックの歴史的概観と現状

まず、イヌイットとユピックという民族の実態を論じ、定義しておきたい。これまでシベリアの東北部の極北地域、アラスカ、カナダおよびグリーンランドの極北地域で生活を営んできた北方狩猟民は、エスキモー (Eskimo) と一括して呼ばれてきた (Damas 1984; ステアート 1993:85-88) が、この分類は外部の者によるものであり、民族や社会の単位を反映したものとは言い難い。これまでのところ、いわゆる欧米人と接触する直前ないし直後のエスキモー社会の分類は、マードックら (Murdock and O'Leary 1975) やダマス (Damas ed. 1984) によって行なわれてきた。例えば、マードックらは、ユイット、南アラスカ・エスキモー、西アラスカ・エスキモー、北アラスカ・エスキモー、マッケンジー・エスキモー、コパー・エスキモー、カリブー・エスキモー、ネツリック・エスキモー、

北米におけるイヌイット及びユピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

サザンプトン・エスキモー、イグルーリック・エスキモー、バフィン・エスキモー、ラブラドル・エスキモー、ポラー・エスキモー、西グリーンランド・エスキモーおよび東グリーンランド・エスキモーそしてアリュートに極北諸民族を分類している (Murdock and O'Leary 1975: 2)。一方、ダマスは、シベリア・エスキモー、太平洋エスキモー、南西アラスカ・エスキモー、セントローレンス島エスキモー、ベーリング海峡エスキモー、コツビュー湾エスキモー、北アラスカ内陸エスキモー、北アラスカ海岸エスキモー、マッケンジーデルタ・エスキモー、コパー・エスキモー、ネツリック・エスキモー、カリブー・エスキモー、イグルーリック・エスキモー、サリミュート・エスキモー、バフィンランド・エスキモー、ケベック・イヌイット、ラブラドル海岸エスキモー、ポラー・エスキモー、西グリーンランド・エスキモーおよび東グリーンランド・エスキモーという分類を採用している (Damas ed.1984:ix)。これらの分類もある意味では、人類学者や言語学者によるものであり、必ずしも実態を反映したものとはいえないし、その社会および地理的境界は時代とともに変化している可能性も否定できない。バーチが北西アラスカ地域のエスキモーやカリブー・イヌイットに対して行なった伝統エスキモー社会の分類もあるが、他の地域ではこのような詳細な社会分類研究は行なわれていないのが現状である (Burch 1980; 1986b)。

ところで1960年代より各地の極北民は、カナダや米国政府などの北方政策の実施により、遊動生活から定住生活へと移行し、貨幣経済の浸透も進行した。1960年代から各地の極北地域で国家と極北先住民との間で、土地権をはじめとする先住民としての諸権利に関する話し合いがもたれるようになった。この結果、1971年には、アラスカの極北先住民に対し、アラスカ先住民諸權益請求措置法 (Alaska Native Land Claims Settlement Act) が成立、1975年にはケベック州の極北部にすむイヌイットがジェームス湾協定 (James Bay and Northern Quebec Agreement) を締結、1979年にはグリーンランドが自治州となりグリーンランド法 (Greenland Home Rule) が発効、1984年にはカナダ北西準州のイヌピアリット (Inuvialuit) が西部極北協定 (Western Arctic Land Claim) を締結、そして1990年には北西準州の中部および東部のイヌイットがヌナブト協定 (Nunavut Agreement) に調印した (スファート印刷中)。そして極北民が関係諸政府との政治交渉とかかわる中で、民族意識や政治意識の高揚が見られてきた。

現在では、かつてエスキモーと呼んできた人々のことを次のように呼ぶようになってきている (Damas 1984; Nattall 1992:11; スファート 1993)。ロシアでは、現在でもエスキモーが使用されているが、彼ら自身はユピギート (Yupiget) と自称している。アラスカでは、極北民の総称としてエスキモーという言葉が使用されているが、北西部に住む人々はイヌピアート (Inupiat) と、中西部や南西部に住む人々はユピック (Yup'ik) と自称して

いる。カナダでは、1970年代に入り、民族差別を反映すると考えられるエスキモーという言葉の使用を控えようとする動きがマスコミを中心に盛り上がり、イヌイト(Inuit)という用語が公称として使用されるようになってきた。しかしカナダの北西部に住む人々は、自らをイヌビアルイト(Inuvialuit)と呼んでおり、イヌイトとは自称していない。通常、カナダでイヌイトという場合は、この2つのグループの総称として使用されていると考えて良い。グリーンランドには、大別すれば3つの先住民グループが存在してきた。グリーンランドの西部海岸はイヌイト(Inuit)やカラリット(Kalallit)が自称として、西北部ではイヌグフイト(Inughuit)が自称として、そして東部海岸地域ではイト(lit)が自称として使用されている。グリーンランドに住むこれらの人々の総称としてカラリットが現在、使用されるようになってきている。このようにみるとこれまでエスキモーとして一括されてきた民族は実は、多様な複数の民族ないし集団から成っているといえることができる。

エスキモーの言語は、言語学的にみると、大きくユピック方言とイヌイト／イヌピアート方言に大別できることなどを勘案して、本論文ではロシアとアラスカ中西部および南西部のエスキモーをユピックとアラスカの北西部からカナダとグリーンランドにかけて住むエスキモーをイヌイトと呼ぶことにしておきたい。

1990年現在の人口分布であるが、おおよそのところシベリアのユピックは1700名余り、アラスカのユピックは27300名余り、アラスカのイヌイト(イヌピアート)は12900名余り(Dorais 1992:239-243)、カナダのイヌイト(イヌビアリュートを含む)は36200名余り(Statistics Canada 1993)、そしてグリーンランドのイヌイトは44000名余り(Nuttall 1992:1)である。

3. 北米を中心とした極北人類学の研究動向

①研究史の概略と1983年までの研究動向

極北人類学の歴史は、100年以上になる。この間、多数の文化人類学的研究、言語学的研究、考古学的研究や形質人類学的な研究が行なわれてきた(Damas ed. 1984)。ここでは、まず1983年頃までの文化人類学的研究の動向について整理してみたい(注2)。

極北人類学の本格的な開始は、フランツ・ボアズ(Franz Boas)によるカナダ東部極北圏のパフィン島でのフィールド調査(1883年)であると考えてよい。この成果は、1888年に『中央エスキモー』として公開されたが、この研究は体系的な民族誌であるとともにイヌイト社会と自然環境との関係に注目しており、生態学的視点を取り入れた最初の研究であると言ってよい(Boas 1888:417)。これ以降、その見方は、極北研究の中心的な視点となった。

フランスの社会学者M. モース (Mauss 1904- 1905) は、当時、存在していた民族誌を利用して、イヌイットの社会形態の変化は、季節の変化に対応していることを指摘し、夏と冬の間での環境の周期的な変化が、2つの異なる社会形態を生み出すと考えた。彼のアプローチは、生態学的視点を取り入れていると共に、社会を全体として理解しようとする全体論的アプローチでもある。

1920年代には、ラスムッセンやビルケット＝スミスらによる第五次チュール調査が実施されグリーンランドの西北部からカナダの極北地域、そしてアラスカにかけての広大な地域を横断する調査が実施された (例えば Rasmussen 1929, 1931, 1932; Birket- Smith 1929)。またカナダでは、1900年代から1910年代にかけてD. ジェネス (Jenness 1922, 1928) のコパー・イヌイットの調査やアラスカ北部沿岸地域とカナダ西部極北地域についてのステファンソン (Stefansson 1913, 1914) の調査も実施された。これらの調査の結果、カナダのイヌイットについての科学的な知識が増大した。

極北の文化人類学的研究は、第二次世界大戦後に急速に盛んになった。この背景には、米ソの冷戦や国境 (主権) 問題が発生したためにカナダや米国は、旧ソ連に隣接する北米の極北地域の民族、地理や環境についてさらに多くの情報を得る必要性が出てきたという政治的要因があった。筆者は、この国家が抱える諸問題と極北人類学の隆盛との間には因果関係があると考えている。ともあれ多数のフィールド調査が、1950年代から1960年代にかけて極北地域のいたる村落で実施された。例えば、ベーリング海のセントローレンス島でハージ (Hughes 1960) が、アラスカ北西部のイヌイットの間ではスペンサー (Spencer 1959)、ヘンリック (Heinrich 1963) やバーチ (Burch 1966) が、グブサー (Gubser 1965) がアラスカのヌナミュートの間で、ウィルモット (Willmot 1961) がケベック州北部のイヌクジュアックで、サラダン＝ダングルーレ (Saladin d'Anglure 1967) がケベック州北部のウエイカムベイで、バリクシ (Balikei 1964, 1970) がカナダ中部極北地域のペリーベイおよびケベック州北部のクジュアラピックとポブングニツクで、グレイバーン (Graburn 1960, 1964, 1969) がケベック州北部のサルイトで、ホニグマン夫妻 (Honigmanns 1965, 1970; Honigmann 1962) がカナダの西部極北地域のイヌピック、東部極北地域のイハライトおよびケベック州北部のクジュアラピックで、ダマス (Damas 1963) がカナダの中部極北地域のイグルーリクで、ブリッグス (Briggs 1970) が中部極北地域のバックリバーで、ゲンプル (Guemple 1966) とフリーマン (Freeman 1964, 1967, 1969- 70) がハドソン湾のベルチャー群島で、そしてベン＝ドーア (Ben- Dor 1966) がラブラドルのマコピックで調査を行なっている。これらの調査の主眼は、一部の研究を例外とすれば、概して「伝統的な」イヌイットやユピック社会の再構成をおこなうことであり、その基盤として環境への適応を重んじる生態学的アプローチが採用されていた。この視点では、親

族関係、宗教、生業技術や物質文化はすべて人間が極北の自然環境へ適応するための手段であるとみなす傾向があった。また、ホニグマン夫妻やグレイバーンのように定住化したイヌイットの文化変容に焦点を当てる研究も行なわれた。この時期の極北における社会変化研究は、文化変容研究や社会の崩壊的变化に注目することが多かった。一方、伝統的な社会人類学的調査も多数行なわれた。ダマス、グレイバーン、バーチ、ヘンリックやゲンブルは、アラスカやカナダのイヌイットの親族および家族関係や擬似親族関係の研究を行ない、極北地域における社会的な変異や多様性の存在が認識されることとなった(例えば Damas 1969a, b; Befu 1964; Guemple, ed. 1972)。

1960年代後半から1970年代にかけては伝統社会の再構成や社会変化の研究からイヌイットやユピックの土地利用など先住民諸権益獲得運動と深くかかわる応用人類学的研究がなされるようになった(Freeman ed. 1976; Brice - Bennett ed. 1977)。先住民諸権益獲得運動が盛んになるにつれて、人類学者が以前のように村に長期の住み込みを行ない親族や社会生活について調査をすることが難しくなり、社会人類学者や文化人類学者の活動が低迷し始めた。また、研究課題に多様化が見られはじめたのも1970年代であるといえる。

1970年代から1980年代のはじめにかけていくつかの分野で注目すべき研究が公刊されている。その一つは、ヨーロッパ系カナダ人とイヌイットの関係やエスニシティーに関する問題であり、ペイン(Paine ed. 1977)やブロディ(Brody 1975)らによって正面から取り上げられた。ペインは、カナダ政府が実施した温情主義に基づいた政策を福祉植民主義(welfare colonialism)として特徴づけ、カナダ政府の先住民に対する取り扱いを間接的に批判している。また、ケネディー(Kennedy 1981)は、ラブラドルにおける同じ村に共住している民族集団の境界の問題を研究している。二つめの分野は、生態学的研究の新たな展開であった。ケンプ(Kemp 1971)は、カナダのイヌイット社会における生業活動をエネルギーの流れの観点から研究したし、ウエンゼル(Wenzel 1981)は、バフィン島のクライドリバーで調査を開始し、親族関係がイヌイットの環境適応において果たす役割を研究した。より生物学的な立場をとる生態学的な人類学研究も、コンドン(Condon 1983)やE. スミス(Smith 1980)などによって行なわれた。コンドンは、一年を通しての日照時間の変化とイヌイットの日常の活動や被病との間にみられる関係を研究している(Condon 1983)。スミスは、生物進化の観点からイヌイットの狩猟活動を最適採資源行動として分析している(注3)。これら2人の研究がそれまでと大きく異なる点は、既存の理論から引き出された仮説を設定し、フィールドワークによって集めたデータを数量的に統計処理を施すことによってより客観的な検証を試みている点である。ただし、最適採資源理論の基盤となる前提はイヌイットの社会や文化的な要因を無視し

ており、適用そのものに問題があるとの批判もある (Wenzel 1984)。第3の研究分野は、社会変化についての研究である。ジャンセンやマッキロイらは、イヌイットの主体的な適応戦略や心理的態度に焦点を合わせ、カナダの東部極北地域のイヌイットが決して外的な政治経済的要因によって翻弄されているのではないと主張した (Jansen 1979; McElroy 1977)。一方で、イヌイット社会がより大きな国家社会や世界経済システムに取り込まれつつあるという巨視的な視点に立つ研究も発表された (Brody 1975:31-32, 1978)。第4の分野としては、これまでの生態学的中心のアプローチに対し、イヌイットのエミクな視点からキャンプ規模、社会組織、テリトリー、リーダーシップや社会変化を解明しようとする研究があらわれた (Riches 1982)。この研究は、これまでの生態学的適応を重視しすぎるきらいのあった北米の極北人類学に対する批判であったが、北米ではほとんど無視される結果となった。一方、北米では象徴人類学や構造主義の視点を取り入れたフィエナップ＝リオードン (Fienup-Riordan 1983) が1970年代よりアラスカのユピック社会で研究を開始した。

1980年代初頭までの極北人類学をふりかえった場合の一つの特徴は、生態学的視点が研究の支柱をなしてきたことであり、諸々の生態学的アプローチが採用されてきたが、極北人類学自体はモースの全体論的アプローチの開発と適用以来、ほとんど人類学理論の展開に寄与することはまれであったといえる (Balicki 1989; Bodenhorn 1990)。研究動向もフィールド調査に基づく「伝統」社会の再構成を目的とする民族誌の作成から先住民諸権益獲得運動を反映した応用人類学的研究へと重点が移行してきたといえる。

②最近の動向と現状

ここでは、過去10年あまりの北米における研究の動向と現状について述べるが、社会変動の問題と生業をめぐる問題は、次の章で詳しく論じることにした。まず、研究主題、研究地域および研究者および研究教育機関の観点から研究の動向と現状を整理してみたい。

1. 研究主題

かつてバーチ (Burch 1977, 1979) は、1977年までの研究動向に対し伝統的な人類学的研究すなわちイヌイットおよびユピック社会の文化の特徴や基本原理の解明を目標とする研究から応用人類学的な研究への変化を指摘するとともに、研究主題の多様化や専門化の傾向に言及している。さらに1977年から1983年にかけての研究論文や単行本の文献目録を作成した岸上 (1984) は、同様な傾向がさらに進んでいることを指摘している。

1983年以降の研究動向に注目した場合、かつての親族研究など社会人類学的研究の

数が減少している一方で、社会変化、経済、経済発展、教育、性差と女性、政府、健康衛生、インパクト研究、言語、法律、先住民の諸権利、政治、社会問題などにかかわる研究の数が増加している。すなわち、現在のイヌイトやユピックが直面している政治、経済および社会的な問題の解決を目指す特殊化した個別研究に多くの人類学者が係わっており、社会や文化を全体として理解し記述する民族誌研究を行なう研究の数が少なくなってきたことがわかる。このなかで、筆者は、社会変動の問題と生業をめぐる問題を後に詳しく論じてみたい。

2. 研究地域

バーチ(1977, 1979)は、ダマスやマードックらの地域分類とはほぼ同じ枠組みで、いわゆる「伝統」イヌイト社会およびユピック社会を分類しているが、このことは1977年以前の研究の大半が特定地域ないし村落での現地調査の所産であったことを示している。一方、バーチの地域分類と今回の調査結果(岸上 1994 a)とを比較してみると、バーチの分類枠組みでは、最近の研究を分類しきれないことが分かる。すなわち研究の地域単位が、個別の村落や伝統的な社会単位からより広域な地域、行政区画、国家単位や国際関係が研究の単位になってきており、研究単位に大きな変化が見られる。

3. 研究教育機関と研究者

カナダと米国の研究機関と研究者の研究を、いくつか紹介してみたい(注4)。

カナダには、極北関係の研究機関として、カルガリー大学(University of Calgary)の北米極北研究所(Arctic Institute of North America)、アルバータ大学(University of Alberta)のカナダ環極北研究所(Canadian Circumpolar Institute)およびマギル大学(McGill University)の北方研究調査センター(Centre For Northern Studies and Research)およびラバル大学(Université Laval)のイヌイトおよび環極北研究会(Groupe d'études inuit et circumpolaires)がある。これらの大学には、何名かの文化人類学者がおり極北研究を行なっている。このうち北米極北研究所とイヌイトおよび環極北研究会は、それぞれ"Arctic"と"Études/Inuit/Studies"という学術雑誌を定期的に発行している。ラバル大学の研究者が中心となって2年に一度イヌイト研究学会(Inuit Studies Conference)が開催されている。

アルバータ大学には、M. M. R. フリーマン(Freeman)が研究教授としており、先住民の生業捕鯨の問題、食物や栄養問題および生業の問題に関して応用人類学的研究を行なっている。フリーマンは生態人類学者であるが、これまで一貫してアザラシ猟など狩猟活動がイヌイトの文化と社会の基盤であることを主張し、再生資源の管理保全の重要性を指摘してきた(Freeman 1984; 1986)。アラスカやカナダの西部極北圏のイヌイトの自家消費用の捕鯨を研究し、その文化社会的重要性を強調するとともに、欧米や

日本の商業捕鯨とは異なり、同じ国際ルールで禁止することによって生ずる社会的弊害を国際捕鯨委員会や関係政府に対し答申したりしている (Freeman 1989; Freeman, Wein and Keith 1992)。また現在のカナダの西北部極北地域のイヌイットの狩猟活動によって得られる食物の栄養上や社会文化的な重要性をカナダ北西準州のアクラビック (Akllavik) で体系的に研究し、指摘している (Freeman 1988a,b; Wein and Freeman 1992)。

マニトバ大学 (University of Manitoba) には、マチアッセン (Matthiasson 1992) がおり、1960年代に調査を行なったバフィン島北部のデータをもとに民族誌的な著作を出版しているが、極北でのフィールドワークからは遠ざかっている。一方、医学部に属する J. オニール (O'Neil) は、カナダの中部極北地域やマニトバ州東部のイヌイット社会における医療システムや精神的なストレスなど精神衛生に関する医療人類学的研究を行なってきた。彼の研究の特徴の一つは、いちちやくイヌイットの青年男女の若年層に着目した点である (O'Neil 1984; 1986)。また、マニトバ大学には、コパーやカリブー・イヌイットの服飾を研究しているオークス (Oakes 1988) がいる。

サスカチュワン大学 (University of Saskatchewan) には、先住民法律研究センター (Native Law Studies Center) があり、カナダや米国の先住民諸権益請求問題や先住民としての諸権利に関する論考が多数出版されている。また、同大学には文化人類学者のウィリアムソン (Williamson 1985, 1988) がおり、最近では、カナダのカリブー・イヌイットの名前の文化的重要性についての研究を進めている。

オンタリオ州にあるマックマスター大学 (McMaster University) には、カナダ中部極北地域のイヌイットの親族研究で多大の業績を残したダマス (Damas 1963, 1969a,b) がいたが、すでに引退している。ダマスは引退するまで、北米インディアンハンドブックの第5巻極北の編著 (Damas ed. 1984) や接触伝統期 (contact-traditional period) の概念の再検討 (Damas 1988) を行なうなど極北研究を代表する研究者の一人であった。西オンタリオ大学 (University of Western Ontario) には、かつて親族や擬似親族研究の象徴論的研究を開拓したゲンペル (Guemple 1965, 1969, 1979) がおり、最近ではイヌイットの社会化 (Guemple 1988) や分業との関係から見た男女差 (Guemple 1986) などの研究を行なっている。

ケベック州のハル市にあるカナダ文明博物館 (Canadian Museum of Civilization) の研究部には、カナダ東部のラブラドル・イヌイットの民族歴史 (ethnohistory) を研究しているガス・テイラー (Taylor) がいる。彼の立場は、生態環境へのイヌイットの適応に焦点をあてたものであったが、最近では、モラビア教団の書き残した日誌や記録をもとにラブラドルにあった捕鯨儀礼、夏期の祭りや儀礼小屋の存在を指摘し、その再構成を行なっている (Taylor 1985, 1990, 1993; Taylor and Taylor 1986)。彼は、ラブラドル・イヌイットの宗教を再構成することとともに、ホークス (Hawkes 1916) の民族誌の誤りを

訂正することをライフワークとしている(注5)。また、イヌイットの滑石彫刻や版画など芸術作品を研究しているO. レロー (Leroux) が同研究部にいる。

モントリオール大学 (Université de Montréal) では、ネツリック・イヌイットに関する生態学的研究と映像人類学研究で有名なバリクシ (Balicki 1964, 1970) が教鞭を取っていたが、最近、引退したため、同大学の人類学部には、極北人類学者はいなくなった。ただし、ケベック州北部のイヌイットの人口を研究している人口学者が何名か同大学にはいる(例えば、Choinière et Robitaille 1993)。また、音楽学部には、北部バフィン島や北ケベックののど鳴らし歌など民族音楽の研究を行なったJ-J. ナチエ (Nattiez 1985, 1988) がいる。

マギル大学の地理学部には、G. ウエンゼル (Wenzel) とL. ミュラー=ヴィレ (Müller-Wille) がいる。ウエンゼル (Wenzel 1981) は、生態人類学者であり、1970年代より一貫して親族組織と生業活動との関係や生態適応において親族関係が果たす役割を研究してきた。最近では、グリーンピースなど自然環境保護団体や動物愛護団体による社会運動の結果、イヌイットがこれまで収入源としてきたアザラシの毛皮の不買運動がヨーロッパや北米でおこり、イヌイットは経済的な問題に直面し、これはさらに生業の維持や社会関係の維持に悪影響を及ぼすことを指摘している (Wenzel 1991)。ウエンゼルは、イヌイット社会の存続のためには、生業と毛皮交易の存続が重要であると主張している。ミュラー=ヴィレは、ケベック州のイヌイットが居住する極北地域であるヌナビック地域 (Nunavik) の地名をイヌイットの文化団体の一つであるアバタック文化研究所とともに調査し、地名を記録に残すとともに、地図や地名録を作成してきた (Müller=Wille 1987)。最近では、地域社会を越えた、新たなアイデンティティの準拠枠となるヌナプト意識やヌナビック意識がどのように生成されるかに関する研究を進めている。

ケベック市にあるラバル大学では、サラダン=ダングルーレ (Saladin d'Anglure)、ドレ (Dorais) やツルデル (Trudel) らの研究者とともに、何人かの若手研究者が精力的に研究を進めている。フランス系カナダ人の研究者は論文をフランス語で出版することが多いので、英語の使用が主流を占めている北米の人類学会では正当な評価を受けていないような感があるが、ラバル大学の人類学部の極北研究は実績と人材育成の点では、現在のカナダにおける極北研究の一大中心をなしていると思う。サラダン=ダングルーレは、もともとはケベック州北部のウंगाバ湾地域のイヌイットの民族誌的研究を1960年代より行っていたが、1980年代以降は、シャーマニズム、第三の性、民族天文学や宇宙論に関する研究をイグルーリックでの調査に基づいて行なってきている (Saladin d'Anglure 1985, 1986, 1990)。ドレ (Dorais) は、イヌイット語の専門家であり、現在、最も広範

にイヌイット語を研究している言語人類学者の一人である。彼は、東部極北圏のイヌイット語の文法づくりや言語学的分析を行なうとともに、多様なイヌイット語の比較研究や歴史の研究にも着手している(例えば Dorais 1985, 1990, 1992, 1993)。ツルデルは、数少ない民族歴史研究者(ethnohistorian)であり、ハドソン湾交易会社の交易所の記録を利用してケベック州北部のイヌイットの毛皮取引を研究している。彼は、ケベックのイヌイットは、1800年代より毛皮取引にかかわってきたが、毛皮取引はイヌイットの生活様式を大きく変化させたのではないことを古文書記録を用いて立証した。このことは、イヌイットは自らの目的に応じて毛皮取引に参加していたのであり、毛皮取引がイヌイットの「伝統的な」生活を一方的に破壊したのではないことを意味しており、これまでの見解に修正を促すと言える(例えば Trudel 1991)。また、ラバル大学で学位を取ったデュフォー(Dufour)は、カナダ・イヌイット社会に蔓延している難聴の医療人類学的研究(1989)をおこなっており、デュエム(Duhaime 1983, 1987, 1991, 1992)は、イヌイットの定住生活、経済や国家との関係を研究している。ラバル大の教官は伝統志向の人類学者であるのに対し、若手の研究者は応用人類学を志向しており、現代の極北人類学の流れを象徴していると思う。

ニューファウンドランド州の記念大学(Memorial University of Newfoundland)には、民族誌『決して怒らない』(1970)で高い評価を得た心理人類学者のJ.ブリッグス(Briggs)や『白い極北』(1977)を編集した応用人類学者のR.ペイン(Paine)がいる。ブリッグスは、子供の社会化やイヌイットの情緒や心理に関する研究を現在でも行なっている(Briggs 1983, 1985, 1991)。また、極東ロシアの民族政策に関する研究を行なっているバートルズ夫妻がいる(Bartels and Bartles 1983, 1986, 1989)。ノバスコーシア州のマウント・セイント・ヴィンセント大学(Mount Saint Vincent University)のB.リチリング(Richling)は、ラブラドル・イヌイットの再移住やキリスト教化の問題を研究している(Richling 1985a,b; 1989)。

以上、カナダの状況をみると、大学で教鞭を取っている極北研究者の高齢化が進行しているとともに、カナダの人類学の博士課程をもつ主要大学であるブリティッシュコロンビア大学(University of British Columbia)、トロント大学(University of Toronto)、マギル大学(McGill University)やモントリオール大学(Université de Montréal)の人類学部に極北民族を専門とする文化人類学者が皆無であるのは極北研究の将来を考えると誠に残念なことである。この状況は、米国にもあてはまる。

かつて、1960年代から1970年代にかけて米国のシカゴ大学(University of Chicago)やウイスコンシン大学(University of Wisconsin)には何名かの極北の専門家があり、一時は多数の博士号が極北の研究で授与された。ところが、1980年代から1990年代にかけて、米国の主要大学にはイヌイットやユッピックの文化人類学的研究を専門にしている研究

者は数えるくらいしかいなくなっている。

コネチーカット大学 (University of Connecticut) には、W. ラフリン (Laughlin) や N. チャンス (Chance) がいまでもいるが、両者ともかなり高齢であり、退職が近づきつつある。最近、チャンスはアラスカ北西部のイヌピアート社会を中心に、社会変化についての本を出版しているが、彼の視点は、世界システム理論に近いものになっている (Chance 1990)。ダートマスカレッジ (Dartmouth College) には、極北研究所と極北図書コレクションがあるが、極北地域を専門とする専任の文化人類学者はいない。

アーカンソー大学 (University of Arkansas) には、R. コンドン (Condon) がおり、学術雑誌 *Arctic Anthropology* を編集するとともに、精力的に研究を進めている。コンドンの研究は、日照時間、人間の活動と被病との関係に関する人類学的研究 (Condon 1983) が彼の出発点であったが、現在は、ホルマン村の青少年の行動、性差 (ジェンダー) や社会変化の研究に従事している (Condon 1987, 1990, 1991; Condon and Stern 1993)。

シアトルにあるワシントン大学 (University of Washington) には、進化生態学の視点からイヌイットの狩猟活動や分配活動を研究している E. スミス (Smith) がいる。スミスは、ケベック州のイヌクジュアックでフィールドワークを行ない、イヌイットの冬のアザラシ猟など生業活動を、最適採資源理論を援用しながら、経済、生態および文化と深くかかわる人類進化史上の適応戦略として分析している。彼の立場は、文化や社会的要因を二次的なものとみなす傾向があり、文化人類学者から誤解されることが多いが、彼はデータを検証可能な形で提示し、数量化したデータで吟味をするという客観的方法を採用した点で高く評価されるべきである。

カリフォルニア大学のバークレー校 (University of California, Berkely) には、イヌイットの親族研究で有名な N. H. H. グレイバーン (Grabum 1986a, b, 1993) がおり、最近ではイヌイット芸術の象徴論研究などを行なっている。また、ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles) の W. オズワルト (Oswalt 1990) は、アラスカ南西部のユピックの民族史 (エスノヒストリー) を最近、出版している。カリフォルニア大学アーヴィン校 (University of California, Irvine) のジョルジャンセンは、アラスカにおける油田開発の先住民社会に及ぼした諸影響を研究し、その成果を出版している (Jorgensen 1990)。

米国の首都ワシントンにあるスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) の自然史博物館の人類学部門には、考古学者である W. W. フィッチュー (Fithzugh) がいるが、極北地域を専門とする文化人類学者は専任としてはいない。ジェサップ・プロジェクト II (The Jesup North Pacific Expedition II Project) のためにロシアから招待されている I. クルプニック (Krupnik) 博士が現在おり、環北太平洋諸文化の比較研究を計画し、遂行中である。クルプニックは、ロシア極東に住むユピックの専門家であり、生態学的視点をとりつつ

生業活動や社会組織の再構成を行ってきた (Krupnik 1985a,b, 1987, 1988, 1990, 1991, 1993)。また、協力研究員として、E. S. バーチ (Burch, Jr.) がいる。彼は、この20年間、米国の極北研究をリードしてきた研究者の一人である。彼の業績は、いくつかあるがその中でも、これまで3つの点で高い評価を得てきた。第1は、アラスカ北西部のイヌピアートの家族および親族構造の再構成と分析である (Burch 1975)。第2は、ハドソン湾西岸の内陸部に住むカリブー・イヌイットの祖先は、13、14世紀頃にハドソン湾西岸を南下し、内陸部に広がったチャーレ文化の担い手であったとするエルマー・ハーブ (Harp 1962:73-74) の仮説と17世紀頃にコパー・イヌイットの地域から内陸を移動してきた人々の祖先であるとするウィリアム・テイラー (Taylor 1965:14-15) の仮説をエスノヒストリーの手法を用いて吟味したことである。両方の仮説の長所と欠点を指摘するとともに、カリブー・イヌイットの内陸適応は比較的最近のもので、20世紀初頭のカリブー・イヌイットの文化は極北の沿岸部ではなく、キーワティン地域の南部で発達をみたものであるという仮説を提起した (Burch 1978)。さらに彼は、北西アラスカのイヌイット社会が、1816-1842年の時期には、複数の双方向的な地縁拡大家族からなる25の社会に分れていたことを再構成した (Burch 1980)。彼の最近の研究は、アラスカ北西部のイヌイットとカナダのカリブー・イヌイットに関するものがほとんどである。内容的には、社会や生業などに関する概論的な著作 (Burch 1984, 1985, 1986a, b, 1988a, 1991)、交易や交換に関する特定のテーマに絞った研究 (Burch 1988b, 1988c)、ラスムセンに関する著作 (Burch 1988d, e) や世界の極北研究組織に関する論考 (1993) が出版されている。さらに数少なくなりつつあるイヌイットの古老とのインタビューに基づく伝統社会の再構成の緊急性を指摘している (Burch 1991)。

アラスカには、イヌイットとユピック研究の拠点としてアラスカ大学フェアバンクス校およびアンカレッジ校 (University of Alaska, Fairbanks and Anchorage) そしてアラスカ州政府の魚および狩猟動物局 (Dept of Fish and Game) の生業部門 (Division of Subsistence) があり、複数の研究者がいる。フェアバンクス校には、極北研究に携っているエランナ (L. J. Ellanna) とブラック (L. Black) がいる。エランナはベーリング海峡の諸島部に住んでいるイヌイットやユピックの生態、人口、生業および社会組織に関する研究を行っている (Ellanna 1983, 1988a, b; Ellanna and Sherrod 1984; Ellanna and Wheeler 1989)。ブラックは、これまでアリュートの民族学的研究を行ってきたが、最近では特に芸術や民話のモチーフや捕鯨などに関する研究を公表している (Black 1983, 1987)。また、アンカレッジ校の生態人類学者であるラングドン は、貨幣経済下においても生業が活力を失っていない点を強調する研究を行っている (Langdon 1991)。

アラスカ州政府内では、ウルフ博士の統轄のもと複数の人類学者が、アラスカの先

住民社会における生業の問題を取り扱っている (Wolfe and Walker 1987)。とくにアラスカ州の生業部門は、人類学者と契約を結び、イヌイットやユピックの生業に関する研究を実施し、興味深い成果を挙げている (例えば、Ellanna and Sherrod 1984, Burch 1985)。特に、現在の貨幣=生業混交経済の研究は、先住民社会の将来を考える上で、経済的のみならず文化社会的に重要である。この問題に関しては、生業論争として次の章で取り上げたいので、詳細についてはここでは述べない。

最後に、大学においては専任の地位を有していないが、注目すべき研究を行なっている何人かの人類学者を紹介しておきたい。まず、フィエナップ=リオードン (Fienup-Riordan) の研究にふれておきたい。彼女の研究は、大きく分けてユピックの生業の研究と世界観ないし象徴の研究に大別できる。彼女の代表作である『ネルソン島エスキモー』(1983)では、生業のイデオロギーを研究の中心にすえ、如何にリサイクリングの思想が日常生活のあらゆる側面に浸透しているかを構造論的な視点から全体として描き出すことに成功している。そして、モノグラフ『悪い季節がくる時』(1986a)ではユピックの生業活動を綿密にかつ正確に記録に残している。また、ユピックの世界観や象徴に関する研究を多数、精力的に進めている (例えば、Fienup=Riordan 1986b, 1987a,b, 1990a,b など)。

また、英国のケンブリッジ大学で学位を取得したB. ボーデンホーン (Bordenhorn 1989) は、アラスカのイヌピアート社会の捕鯨複合、親族関係、養子縁組などに関する象徴人類学的な研究を行なっている。さらに彼女は、イヌピアートの女性の象徴的研究の成果を用いて、狩猟採集民についての人類学的な一般モデルに検討を加えている (Bordenhorn 1990)。同じくケンブリッジ大から学位を取得したM. ナタル (Nuttall 1992) は、グリーンランドの北西部のカラリットの村で、親族関係、名前、生業や社会経済変動を研究し、その社会の文化的な側面の歴史的連続性を指摘している。さらにフランス人のコリニョオン (Collignon 1993) は、コパー・イヌイットの土地利用パターンの歴史的变化の研究を行ない、1970年代の後半に入ってからイヌイットと土地との関係が大きく変わり始めたことを指摘している。X. ブレゼル (Blaisel and Arnakak 1993) は、カナダ・イヌイットの神話の象徴分析を通して、イヌイットの主要な儀礼、出産、冬のアザラシ猟や葬式との関係を研究し、出産と狩猟の間には循環的な連続性があることを指摘している。

以上、ここでは現在、活躍中の北米の極北人類学者を中心に取り上げ、その研究を概略してきた。その中で、筆者が、現在の極北人類学の中心課題であると考えている社会変動と生業の問題を特別に取り上げて論じてみたい。

4. 社会変動研究と生業研究

北米における極北研究は、これまで多様化が進むとともに、多くの重要な研究がなされてきたが、筆者は、この10年の歴史の中で重要でありかつ大きく展開した問題として社会変動研究と生業研究をここではとりあげたい。

1. 社会変動研究

1980年代に入る以前に出版された研究は、イヌイトやユッピックの文化や社会の崩壊的变化や機能の不全化を強調するものが多かった (Fienup- Riordan 1983:354)。ところが1970年代から1980年代にかけてフィールド調査をおこなった人類学者のなかに、社会や文化の変化よりも連続性に注目する研究者が出てきた (Fienup- Riordan 1983; Wenzel 1991; Nuttall 1992)。一方では、急激な変化を強調する研究者は、コミュニティー生活に焦点をあわせる従来の視点とは異なり、イヌイトやユッピック社会の国家や世界経済システムといったより大きなシステムへの吸収、統合にともなう、より大きなシステムの部分となることや従属化する傾向に着目する巨視的な視点に立つ研究がはじめた (例えば、Klausner and Foulks 1982; Chance 1990; Jorgensen 1990; Pretes 1988) (注6)。この社会変化に関する研究の2つの流れをここでは、整理し、検討を加えてみたい。

アラスカの北西部の北側沿岸では、1970年代より油田開発が行なわれたために、この開発によってもたらされた現金収入が、イヌピアートの人々を突然金持にしてしまった。例えば、1970年代初頭のイヌピアートの一世帯あたりの平均年収は2000ドル余りであったものが、1979年には75000ドルにまで増大した。この変化は、いくつかの変化をともなっていた。かつては単純な政治組織しか持たなかった狩猟社会が、高度に技術的で官僚制を持つ、政治経済的に階層化の進んだ社会へと変化してしまっていた (Klausner and Foulks 1982:2)。この変化は、また村におけるアルコール消費量の増加を結果し、殺人、自殺や酒に関係する死亡者の数が増加したために、多くの人々の社会生活に、もろもろの影響を及ぼすこととなった。

このような背景をもとに、クラウスナーとフォークス (Klausner and Foulks 1982) は、アラスカ北西部におけるアルコールの乱用がイヌピアートの村に与えた影響に関する研究を行なった。この研究の目的は、この地域でのアルコール消費が関与している社会問題が急増した原因となる歴史的、社会文化的、経済的そして政治的要因を査定し、イヌピアートの政府に対し政策の提言をすることであった (Klausner and Foulks 1982:1-2)。この研究の中で興味深い点は、イヌピアート社会の変化を米国社会の政治経済 (political economy) との関連で取り扱っていることである。彼らは、イヌピアート社会の変化は、首長のいない親族集団から階級社会へ、分散した遊動集団から商業や政治のエリートによって支配される社会へ、孤立した自立生業経済からより大きな階級社会の周縁部

に位置する政府の補助金に依存する経済へという方向への移行であると指摘している。

特に、この研究では、イヌピアート社会がより大きな国民社会や世界の政治経済システムへ取り込まれてきたことが強調されている (Klausner and Fouls 1982:264- 265)。この吸合過程で、イヌピアートの村々において人々の間に教育、収入や住宅条件の点ではっきりした差異がみられはじめ、階級構造が出現していることが指摘されている (Klausner and Fouls 1982:266)。この研究では、イヌピアートの社会は変化の諸要素を統合することができず、社会の統合がくずれつつあると記述されている。このアノミ的的社会状況の中で、人々はますます孤立化を深め、アルコールに深く依存するようになる。これは更に暴力やその他の社会問題を生み出す原因となっている。この研究では、現在のイヌピアート社会の社会的秩序や統合の崩壊など変化の側面が強調されている。

同じイヌピアート社会を研究しているN. チャンス (Chance 1990) もまた、その社会の変化を理解する上でクラウスナーらと同じく世界システム理論や従属理論の視点が有効であると主張している。しかし彼は、原初的な階級構造が出現しているとともにそれを抑制しようとする社会的な力が働いていることを指摘している。まず、階級的階層の出現については、アラスカ先住民諸権益請求措置法 (Alaska Native Claims Settlement Act) (注7) の施行の結果、イヌピアートの財政や自然資源は地域ごとに設立された会社の管理のもとにおかれることとなったが、非常に複雑である会社組織を運営していくためには、組織力や能力を必要とし、少数のイヌピアートのエリートと非先住民のマネージャーたちがリーダーシップをとる結果となったため、階層差が出現したと考えられている (Chance 1990:213- 214)。一方、その階層化を抑えようとする作用もある。イヌピアートの政治リーダーたちは、集合的な富と資源を共有的に分配することによって支持者を得ようとした。すなわち彼らは、イヌピアートの職業選択幅の拡大を図ったが、これは階層化した関係が形成されることを抑制する効果をもっていた (Chance 1990:214)。

産業や利潤追求を代表する力と親族関係に基づき、協力的で、生業志向の生活様式の力とが接合することによってイヌピアートの間では、内的な葛藤が生み出されていた (Chance 1990:214)。しかし、チャンスは、クラウスナーらとは異なり、イヌピアートの文化的な統合性やアイデンティティは依然として存続していると主張する。これは、この地域の捕鯨をめぐる諸活動 (捕鯨複合) がイヌピアートの文化的な生活様式の基盤として機能しており、文化的な独自性を示すものとしての役割を果たしているからだと言及する (Chance 1990:215)。さらに、イヌピアートの人々の間では、富や権力において明確な差異が出現しつつある一方で、彼らはイヌピアートの文化的統合性やアイデンティティを強化するいろいろな活動に参加しており、このことが、階層化した新たな関係によって生み出される緊張関係を緩和しているのだとチャンスは指摘している (Chance

1990:216)。チャンスは、イヌピアート社会がより大きな国民社会や世界経済システムへと吸合されつつあり、社会階層も出現しつつある一方で、イヌピアートは歴史への受動的な参加者ではなく能動的な参加者であると主張している (Chance 1990:216)。

ジョルジャンセン (Jorgensen 1990) は、アラスカのウエインライト (Wainwright)、ガンベル (Gambell) およびウナクラリート (Unalakleet) という3つの村落で調査を行ない、油田開発と1971年のアラスカ先住民諸權益請求措置法がアラスカ先住民の社会や経済に及した影響を記録に残し分析した。彼は、調査の結果、アラスカのこれらの村々では、現金収入が減少しかつ社会福祉金への依存度が増大しており、経済的に低迷していると報告している。また、彼は生業 (subsistence) の生活様式が今でも村々には生きついていると報告している。これらの村の経済状態は、次のように要約することができる。第1に、アラスカ先住民の村では、利潤を追求するための会社をつくることに失敗しているうえに、油田開発に係わる仕事にもお印以上には村人が就くことができない状態である。第2に、石油生産は、長期的な利潤を地域にもたらすこともなく、むしろ各地の生業基盤を脅かしつつある。そして住民は、ますます米国連邦政府やアラスカ州政府に金銭や各種サービスや仕事の関係で依存度を高めつつある。第3に、しかしながら先住民は、政府への経済依存と生業の生活様式を巧く統合しながら生活を営んでいるとも言える。

この研究で最も興味深い点は、ジョルジャンセンが、アラスカの先住民社会は、近代経済学の観点からみると成功しているとはいえないけれども、先住民の社会関係や生業経済は現在の生業＝貨幣混交経済下においてもその活力を失っていないことを報告していることである。すなわち、彼の研究は、彼の意図には反して、現在のアラスカではより大規模な社会変化が起こりつつあるものの、いまだに親族関係によって組織されている先住民の生業経済が、現代の新技术と現金収入とを統合することによって、維持されていることを示しているのである (Jorgensen 1990:111-112)。分配の実践が生業経済の中心を現在でもなしているという彼の報告 (ibid. 123) や先住民がそれぞれの村でコミュニティー意識を保持し続けているという報告 (ibid. 311) からこのような解釈が可能となる。さらに、彼の研究は、資本主義経済や国家がアラスカの先住民社会に浸透し、貫徹しつつあることを例証している一方で、これらの社会の外的要因が先住民の文化や社会のあり方を一方的に規定しているのではないことを示している。ジョルジャンセンは、次のように述べている。

『諸制度は先住民の生活様式の保持を目的として、
文化的にはっきりとエスキモー流のやり方で変形され
利用されている。一方、あらゆる技術は彼らの生活

をより快適で予測可能になるように利用されている。』

(Jorgensen 1990:312)

この研究は、アラスカ先住民社会が大きな変化を遂げつつある一方で、いまだに「伝統的な」生業や社会関係が活力を失っていないことを示している。筆者はジョルジャンセンのように現況を近代経済学的な意味で失敗の方向に変化していると一方的に解釈するのは間違いではないかと思う。

プレテス (Pretes 1988) は、経済的に発展した国の中での地域的な発展不全 (underdevelopment) を説明するフランクの従属理論が、カナダ・イヌイット社会の社会変動を説明するためには有効であると主張している。まず、プレテスは、カナダ・イヌイットが地域の諸資源からの収益をコントロールできない上にカナダ国内で政治的意志決定に対して極めて限られた影響力しか有していないと言う点で、イヌイット社会は発展不全の状態であると主張している。そしてこの状態は、資本主義のこの地域への流入、特に、度重なる資本の流入と投資の失敗の繰り返しによって作りだされたのだと主張する(注8)。そしてカナダの極北地域は、南カナダの衛星 (a satellite) であり、多くの食料と生活必需品が他の地域から輸入されなければならない一方で、資源からの収入は南に流出していると指摘している。プレテスの研究は、巨視的視点を取っており、一見、論理整合的であるが、カナダ極北社会における資本主義の展開だけに焦点を合せており、イヌイットの側の反応や実践が無視されているという問題点を孕んでいると思う。

これらの研究は、ユピックやイヌイット社会における変化を強調している研究である。これらの研究に共通している点は、従来のように個々の村を研究単位にするのではなく、より広い地域を国家社会や世界経済システムとの関係から巨視的な視点で、極北社会の変化を取り扱っていることである。そしてその理論的な枠組みとして、世界システム理論や従属理論が採用されているのである。

1980年代に入ってからの変動研究の一つの傾向として、長期のフィールドワークに基づく文化人類学的研究のなかに、表面的な変化を認めつつも社会や文化の連続性を強調する研究が現れたことがあげられる。その代表は、フィエナップ＝リオードンのアラスカのネルソン島での研究 (Fienup=Riordan 1983) であり、ウエンゼル (Wenzel 1991) のカナダのクライドリバーでの研究であり、ナタル (Nuttall 1992) のグリーンランド北西部での研究である。

フィエナップ＝リオードン (Fienup-Riordan 1983) の著書『ネルソン島エスキモー』は、アラスカ南西部のネルソン島に住むユピックについての民族誌である。彼女は、その中で、生業活動や生業のイデオロギーは、現在のユピック社会でもいまだにその

活力を失っていないことを強調している。彼女は、象徴的なサイクリングや交換のイデオロギーが生業活動、親族関係、婚姻、狩猟における獲る側と獲られる側との関係、いくつかの儀礼、アザラシ肉の分配、男女間の分業などのユピックの日常生活のあらゆる領域の文化的な基盤となっていることを報告している。

この研究の中で、非常に印象的な点は、社会文化変化の取り扱い方である。フィエナップ＝リオードンは、ユピックの間で経験的なレベルで、自家生産から店舗で売られている商品への依存の進行、政治的自立から外的な官僚組織への依存化の進行、小規模な社会システムから国家や国際的なことへの係わり合いの増大などの変化が見られることを認めている。にもかかわらず、彼女は、ユピック社会を急激に変化している社会とは描き出さずに、いまだに文化的な次元では統合されたままの変化のない社会として描き出しているのである。彼女は、ユピックの人々の間で起こっている変化は、「伝統的な」文化的価値観の統合の崩壊ではなく、文化の外見上の転化(cultural transformation)ないし構造化された過程であると主張しているのである(Fienup-Riordan 1983:354, 356)。

彼女は、現在のユピック社会を次のように記述している。ネルソン島の沿岸部にある村々の家族は、相互に依存しあっており、狩猟によって得た食物は家族間で、特別の儀礼的な贈り物や日常の食物分配を通して、分配されたり再配分されたりしている。人々は、この分配を「伝統的な」狩猟や漁撈に従事し食物を得ることによってのみ行ない続けることができる。そしてこの食物の獲得活動と分配を通してのみ、家族間の社会関係を再生産することができるのである(Fienup-Riordan 1983:357)。ユピックの人々は、生業のイデオロギーを彼らの文化的な価値システムとして保持しており、生業活動を生活様式として維持したいと望んでいる。彼女によると、生業のイデオロギーは、「吸収し変化させる無尽蔵の能力によって特徴づけられる明らかに時間のないシステムである」(Fienup-Riordan 1983:353)という。そして経済、政治や社会活動の領域における人々の個人的な選択も、いまでもこのシステムに適合するようになされているという(ibid.:353)。従って、この社会の社会文化変化を、これまで文化変容研究が主張してきたような社会や文化の崩壊ではなく、維持ないし連続的变化であると彼女は主張しているのである。この研究は、クラウスナーら(1981)やプレテス(1988)の対極をなす研究であると言えよう。

ウエンゼルは、『動物の権利、人間の権利』(1991)のなかで、カナダのパフィン島のクライドリバーでの現地調査およびカナダや米国の社会運動の活動家とのインタビューによって収集したデータを利用して、グリーンピースによるようなアザラシ保護/動物愛護運動がどのようにイヌイットの生活に悪い影響を及しているかを研究している。

彼は、1980年代に至るまでは、ワモンアザラシ猟がイヌイット社会の社会および経済的な基盤をなしてきたことを、イヌイットの狩猟漁撈活動、分配活動と社会関係との間にある密接な関係を生態適応の視点から注意深く分析することによって、例証している(注9)。1960年代に始まる村落定住時代でも、生業経済は、現金の使用と必ずしも矛盾することはなかったのである。むしろ現金は、狩猟や漁撈活動を円滑に行なうために使用されたのであった。すなわちイヌイットは、狩猟活動によって獲得したアザラシの毛皮を売ることによって現金を獲得し、その現金を利用して狩猟や漁撈に必要なガソリン、ライフルの弾薬やその他の必需品を購入していた。この狩猟や漁撈は、従前通り親族関係によって組織されており、狩猟や漁撈によって獲得された肉や魚は大家族内やそれらの間で交換された。このプロセスを通して「伝統的な」社会関係は再生産されてきたのであった。ところが1980年代にはいり、イヌイットの世界とは別の欧米社会において盛んになってきたアザラシ保護/動物愛護運動の影響によりヨーロッパ共同体(EC)などでアザラシなどの毛皮類の輸入が禁止になり、イヌイットは突然現金収入の道を断たれたのであった。現金なくしては、ガソリンやライフルの弾薬など狩猟漁撈活動に必要な物資を購入することはできず、十分に狩猟や漁撈に従事することができなくなってしまった。このためにイヌイットは、十分な食物を村に持って帰ることができなくなったうえに、以前のように食物を分配することができなくなってきた。これは社会関係の再生産を阻害することを意味する。ウエンゼルは、このような変化はイヌイットの経済基盤を危うくするのみならず、社会的基盤をも危うくすると主張する。この研究は、2つの意味で重要であった。一つは、従来 of 社会変動に関する考えとは異なり、毛皮交易による現金経済の浸透は社会基盤の崩壊をもたらしたのではなかったことを示している。もう一つは、カナダの都市部とは非常に距離が離れている現代のイヌイット社会が世界経済システムの動向に左右されていることを示している。

M. ナタル(Nuttall 1992)は、フィエナップ=リオーダンとは異なるアプローチを採用しているものの、その内容や主張は、フィエナップ=リオーダンのグリーンランド版であると言えよう。ナタルは、グリーンランド北西部のウパーナビック地区のカングスアチアック(Kangersuatsiaq)という村で、親族、名前、命名、狩猟漁撈活動、食物の分配活動やコミュニティー発展についての調査を実施した。彼の研究の一番の特徴は、他の極北人類学者とは異なり、コミュニティーを社会構造ではなく文化的構築物とみならず視点を採用したことである。彼は、コーエン(Cohen 1985)の概念に触発されて、コミュニティーとは、親族、名前、社交性と連続性、景観認知などからなる諸関係の視点から表現される象徴的ないし文化的な構築物であると主張する。そしてグリーンラン

ドのイヌイットのコミュニティーは、狩猟漁撈、食物分配や命名を通して継続的に再生産されてきたと主張している (Nuttall 1992:168-169)。すなわち彼が調査した村落はますます複雑になりつつあるグリーンランド社会の一部であるが、そのコミュニティー意識 (community identity) は、適応過程や新しい事物の変質的受容によって維持されてきたのである。ナタルは、フィエナップ=リオードン (1983) 同様、現在、進行中の変化によっても生業のイデオロギーは商品経済に取って代られることはなく、むしろその変化が既存の文化的な枠組の中へと吸収されていると主張する (Nuttall 1992:178)。また、ウエンゼル (1991) と同様に、生業としての狩猟の存続は、親族を基盤としたネットワーク、分配制度やコミュニティーの存続のための基盤を提供していると指摘している (Nuttall 1992:180)。さらに彼は生業活動とコミュニティーの経済発展は矛盾するものではないと主張している。

この3人の研究者は、イヌイットやユピック社会の変化しつつある側面よりも持続の側面を強調している。彼らは、現在の極北社会において狩猟漁撈活動と分配活動を通して彼らの社会関係やイデオロギーを再生産し続けてきたことを報告している。また、彼らはこれらの社会が市場経済の社会システムと連結してきたことは、彼ら自身のやり方で社会を再生産することを阻害するものではなかったと主張してきた。しかし、ウエンゼルは、カナダや米国やヨーロッパでのアザラシ/動物愛護運動がこのまま続き、アザラシの毛皮の不買が続くならば、イヌイットは現金収入の道を断たれ、生業活動を従前どおりに維持できなくなり、イヌイット社会の経済および社会的基盤を崩壊させる可能性があることを指摘している。これらの研究は、長期のフィールドワークに基づく成果であり、その実証的価値を高く評価するものの、社会や文化の連続性をイデオロギーやシステムのレベルで取り扱っており、その成員の個人差や世代間の違いには十分な注意が払われていないという問題が残っている (注10)。

ここでは、2つの極端に異なるタイプに分けて社会変動研究を紹介してきた。一方の極は、極端に社会の変化の側面を強調するクラウスナーら (1982) やプレテス (1988) の研究である。もう一方の極は、フィエナップ=リオードン (1983) とナタル (1992) の極端に社会の連続性を強調する研究であった。その間に、ウエンゼル (1991)、ジョルジャンセン (1990) やチャンス (1990) の研究は位置する。ウエンゼルらの研究は、イヌイットやユピック社会が、より大きな政治経済システムに吸合されてきたことを認識しているが、従前の社会関係や生業活動は、貨幣=生業混交経済システム下でさえ活力を失っていないことを示している。そして次に紹介する現在の生業活動の研究は、極北先住民社会の変化と持続を理解するために非常に重要な領域であると思う。

2. 生業研究

最近の研究の動向の一つとして、混交経済下における生業に注目する研究が多数行なわれている。これらの研究は州政府や連邦政府の先住民に対する社会経済政策にかかわる問題として重要になってきている。ここでは、生業とは何か、生業と貨幣経済との関係、生業と文化価値との関係や食物分配についての最近の研究について整理してみたい。

①生業とは何か。

極北人類学において、生業とは単なる経済のタイプではない。イヌイットやユピックの生業とは、主に親族関係によって組織される、狩猟漁撈活動と分配活動からなる社会システムであると認識されてきた (e.g. Henrich 1963:68; Fienup- Riordan 1983:347; Wenzel 1991; Ellanna and Sherrod 1984; Usher and Wenzel 1988:5- 6)。エランナとシェロッド (Ellanna and Sherrod 1984:118- 119) は、親族関係が生業活動を組織し、村の社会組織は生業活動のシステムによって形づくられ、イヌイットやユピックが生業活動に参加することは先住民の社会関係の維持に貢献していることを示すことにより、生業活動と社会関係が相互依存の関係にあることを指摘している。

同様に、アッシャーとウエンゼルは、カナダの北西準州のイヌイットやデネ/メーティスの生業は社会経済であると述べ (Usher and Wenzel 1988:5)、3つの特徴を指摘している。第1に、生業生産は、親族制度の一関数であり、社会の他の諸側面と同じように親族関係に基づくきまりによって規定されている。通常、生業の組織は、広義の親族集団と世帯の二つのレベルで組織されている (Usher and Wenzel 1988:4)。第2に、拡大家族 (ilagait) は狩猟漁撈と加工のための労働力と資源をプールする社会単位である (Usher and Wenzel 1988:6)。第3に、獲得した資源の配分や再配分は拡大家族の組織によって規定されている (Usher and Wenzel 1988:7)。

生業の社会経済的側面を強調する一連の研究に対し、ボーデンホーン (Bodenhorn 1990) のように、その象徴的側面を強調し、生業を技術と象徴からなる活動であると見る立場もある。この視点は、フィエナップ=リオードン (Fienup=Riordan 1983) の生業に対する考えに近いものであると言えよう。

②生業活動と貨幣経済

ウイルモット (Wilmott 1961:25) は、1960年頃にカナダのイヌクジュアックでは、生業と貨幣の2つの経済領域が共存していたことを指摘している。サルイトのイヌイットを研究したグレイバーン (Graburn 1969; 1971) は、貨幣経済の浸透は必然的に先住民の分配システムの消滅や激的な変化を結果すると考えていた。また、ペリーベイやポブングニツクでフィールドワークを行なったバリクシ (Balicki 1964; 1960) は、ライフルのよう

な近代的な技術をイヌイットが取り入れたことが、経済領域における個人化を促進する原因となり、核家族や個人が基礎的な社会経済的な単位となるだろうと考えた。また、ブロディ (Brody 1975)、アッシュ (Asch 1977) やバージャー (Berger 1977) は、北米の先住民が賃金労働へ参加することは、彼らの生業活動に悪影響や害悪を及ぼすと考えていた。要約すれば、1960年代や1970年代はじめに調査を行なった研究者の大半は、貨幣経済とかかわるいくつかの要因によって先住民の生業活動は維持できなくなり、社会生活も大きく変化するだろうと予想していた。

ところが、1970年代後半から1980年代にかけて実施されたイヌイットやユッピックの生業に関する多くの研究によって、グレイバーン (Graburn 1969, 1971) やバリクシ (Balicki 1960, 1964) らの予想とは異なり、現在のイヌイットやユッピックの間では貨幣経済は生業経済と共存しており、生業経済はその活力を決して失っていないことがわかってきた (e.g. Lonner 1980; Smith 1991; Smith and Wright 1989; Usher 1976; Kleinfeld, Kruse and Travis 1983; Wolfe and Walker 1989; Wenzel 1991; Nuttall 1992; Fienup-Riordan 1983; Ellanna and Sherrod 1984)。これらの研究は、イヌイットやユッピックが入手した現金で食料やその他の生活必需品だけを購入して生活してきたのでもなければ、生業活動を放棄してきたのでもないことを示しているのみならず、その現金収入を利用して狩猟道具、ガソリン、弾薬などを購入することによって生業活動を維持してきたことを例証している (e.g. Smith, E. 1991:358-359; Smith and Wright 1989:96-97; Reeves 1993:88; Fienup-Riordan 1983:353; Wolfe and Walker 1987:68; Nuttall 1992:29; Wenzel 1991:114; Langdon 1991:288)。さらに、女性の収入も夫や親戚の生業活動ために使用されていると報告されている (Kleinfeld, Kruse and Travis 1983:14)。フィエナップ=リオードンは、現金収入と生業活動の関係に関し、「伝統的」生業を続けることによって文化的遺産を守ろうとしている男女はまさに村の中にある経済的な機会をできるだけ開拓することに熱心な人々であることが多かったという事例を引き合いに出し、文化的な価値観と経済の現実の間には、基本的な矛盾はないと報告し、むしろ経済的、政治的、そして社会的活動領域における選択は、共通の文化的価値システムに沿ってなされることが指摘されている (Fienup-Riordan 1983:353)。

ラングドンは、アラスカのトギアク (Togiak) とクインハガク (Quinhagak) という2つのユッピックの村落で調査を行ない、現金の出所と入手した現金の額が、どのように生業活動に影響を及しているのかを調べた (Langdon 1991:272)。現代のユッピック社会の現金の出所は、商業漁業、毛皮の販売、手工芸品の製作、賃金労働や州政府や国家からの補助金 (福祉金を含む) であった。ラングドン (Langdon 1991:288) によれば、これらの出所の収入は、より大きな米国社会と経済的な関係を拡大しつつあるユッピック社

会においてユッピークの生業活動に有害な影響を与えているわけではないと言う。すなわちラングドンは、ユッピークの人々が生業活動を続けるという彼らの文化的なゴールに対する手段として現金を利用していることを確認したのであった (Langdon 1991:288)。さらに彼は、賃金労働に参加することは、生業への参加や生業を続けていくことに大きな影響を及していないようだと言っている (Langdon 1991:283)。

ウエンゼル (1991) は、アザラシの毛皮の取引は、1980年代の半ばまでは生業活動や社会関係の維持に正の貢献をしてきたと主張している。彼は、社会関係の再生産のメカニズムを次の様に説明している。親族関係を基に組織された狩猟集団によって獲物が捕獲された後、その肉は、いくつかの定まったやり方で、拡大家族間や内で分配されたり、くばられたりする。これらの分配の実践を通して、手元に無いが必要な物を獲得でき、食物やサービスの互酬的な交換や循環を通して社会関係が維持されるのである。一方、狩猟活動を通して獲得されたアザラシの毛皮はハドソン湾会社や生協などの会社に売ることができる。この取引によってイヌイットは現金を手に入れることができ、生業活動を続けるためのガソリン、弾薬などを購入するためにその現金を使用することができるのである。現代の社会的脈絡における現金、生業活動と社会関係との間にある相互依存関係は、イヌイットが彼ら自身のやり方で社会を再生産させることを可能にしてきたのである。

③文化的なゴールとしての生業活動

なぜ現在のイヌイットやユッピークの中で多くの者が生業活動を維持しようと望んでいるのかという素朴な疑問が存在している。この問題に対して、文化人類学者の多くは、文化のおよび社会的説明を行なっている。そして多数の研究者は、生業活動がイヌイットやユッピークの文化的価値観やイデオロギーに基づいた活動であるから、続けているのだと考えている (E.G. Fienup-Riordan 1983; Nuttall 1992; Smith, E. 1991)。生業とは、彼らにとっては、単なる生き残るための技術でも、単なる生きるために必要なカロリーを獲得するための手段でもなく、それ自体がゴールの一つとなる、文化および社会的生産活動なのである (Fienup-Riordan 1983:xix-xx)。

第1に、狩猟漁撈活動によって獲得され、コミュニティの中で分配される食物は、イヌイットやユッピーク社会において現金に置き換えることができない文化的価値のあるものである (e.g. Fienup-Riordan 1983:xix-xx, 349; Nuttall 1992:170; Smith and Wright 1989:97; Kruse 1991:324)。アッシャーは、漁撈や狩猟によって入手した食物は、他の物で置き換えたり、現金のような市場の基準で計ることのできない栄養価、社会および文化的価値のあるものであると述べている (Usher 1976:117-118)。

第2に、イヌイットやユッピークは、労働のコストを代償する独特の報償を生業から

獲得できる (Smith, E. 1991:393)。クルーズ (Kruse 1991) は、アラスカのイヌピートの生業や賃金労働のパターンを研究し、イヌピートにとっては、賃金労働よりも生業活動の方がはるかに魅力的であると指摘している。これは、生業活動が、その生産の結果でくる利益以上に、社会的相互作用、挑戦、達成感、村の生活から離れることのできる時間など「プロセスから得られる恩恵」(“process benefits”) をイヌピートに与えることができるからだと主張している (Kruse 1991:324-325)。

第3に、生業活動に従事することによって、イヌイットやユピックは、親族や属するコミュニティーに対して義務を果たすことができる (Fienup-Riordan 1983:357; Langdon 1991:283; Wenzel 1991:99)。フィエナップ＝リオードンは、すべての人が生業によって得た産物の分配ではもらい手になることがあるが、もっと重要なことは、ユピックの人が物を他者に与えることができることであると指摘し、これがユピックが依然として生業に従事する最も重要な社会的要因であると主張している (Fienup-Riordan 1983:357)。

④ 分 配

獲物(食物)とサービスの分配は、イヌイットやユピック社会の生業活動の重要な一側面である。通常、分配とは、「返礼を計算することなしに行なわれる経済的な財やサービスの配分」を意味する (Price 1975)。特に、これらの極北社会では、何種類かの分配システムが発達してきたことが知られている。この分配の実践は、極地環境への適応や社会関係の維持に深く係わっていると考えられてきたため、多くの研究がなされてきた。また、進化論的視点から、エルマン・サービス (Service 1966) は、狩猟採集民社会の経済は、サーリンズ (Sahlins 1965) が愛他的互酬性であると定義した一般化された互酬性 (generalized reciprocity) によって特徴づけられると主張した。アラスカ北西部のイヌピート社会で研究に従事してきたバーチ (Burch 1988b:108-109; 1970:72-78) は、窃盗や等価の財やサービスの交換、交渉による交易が、かつて地縁拡大家族間や他の社会のグループと行なわれており、これらは一般化された互酬性に基ついていないことを指摘し、狩猟採集民社会の経済を単純にその概念で特徴づけることは誤りであると主張している (注11)。しかしながら、狩猟採集民社会とその他の社会とを比較してみた場合、前者の社会では一般化された互酬性に基づく分配が経済活動の顕著な特徴の一つであることには間違いはない (Wenzel 1994; Kishigami 1994)。

大多数の人類学者は、狩猟採集民社会の分配の制度や実践を不確定な資源ベースしかもたない狩猟民や採集民にとっては、生き残るための重要なテクニックのひとつであったと考えている (例えば Ingold 1980:144; Langdon and Worl 1981:35)。最近では、危険性低減仮説 (a risk reduction hypothesis) と呼ばれる食物分配に関する見解が提起されてい

る。ウイスナー (Wiessner 1982) やキャッシュダン (Cashdan 1985) らは、食物分配の制度は、食料不足の際には一種の保険であり、家族や個人のレベルで食物供給の変差を少なくさせる手段として機能していると主張する。進化論的生態学の観点からカナダ・イヌイットの食物分配を研究したスミス (Smith 1980) も、また、この仮説を支持している。彼は、イヌイットの間に見られる食物分配には、利用することのできる一人当たりの食料のばらつきをなくさせるメカニズムがあると考えている (Smith 1980:365)。

これらの仮説の根底には、食物分配は所与の環境に適応する手段であるとする生態適応の視点が存在している。また、先住民の間での交換や分配はキャンプ集団間の平和な関係を創り出したり、維持したりする機能 (Langdon and Worl 1981:36) や物的な豊かさの差異を減少させる、すなわち階層化を抑える平準化機能 (Langdon and Worl 1981:39; Woodburn 1980) があると考えられている。

食物分配に関しては、ダマス (Damas 1972) によるカナダ中央極北地域のコパー・イヌイット、ネツリック・イヌイットおよびイグルーリック・イヌイットについての体系的な研究がある。彼は、これらの3つのグループには、(1) 特定のパートナー間での分配、(2) 自発的な食物分配、および(3) コミュニティーやキャンプ全体での共食の3つの食物分配があったとしている。3つのグループ間で食物分配の制度と実践を比較することにより、ダマスはそれらのグループ間にある程度の変差があること、食物分配は拡大家族内で完結するものもあれば、拡大家族間を横切る非親族間での分配もあること、そして食物分配には、場所 (locality) という要因が重要であることを指摘している (Damas 1972:235)。さらにダマスは、イヌイットの食物分配の機能として、最少限の食料しかない時には生存を確実にする役目を果し、食料が豊富な時には食物の所有量を平準化する機能があることを指摘している (Damas 1972:236)。

カナダのバフィン島のクライドリバーで調査を行ってきたウエンゼルは、その村には6つのタイプの食物分配が存在することを指摘している。その6つのタイプとは、(1) 狩猟漁撈活動にいっしょに従事した親族関係のないハンター間での分配、(2) ハンターとそのハンターが属している拡大家族のリーダーとの間での分配、(3) 拡大家族のリーダーと彼の下にいる親族の者との分配、(4) 拡大家族のリーダーとコミュニティー全体との間での分配、(5) ハンターとそのハンターの親戚でない狩猟集団のリーダーとの間での分配、そして(6) 教会や生協のような中心的な制度体のリーダーとコミュニティー全体との間での分配である。ウエンゼルは、(2)、(3)、(4) と(5) の分配のタイプは「伝統的な」ものであり、(1) と(6) のタイプは、1950年代以降に半ば強制的な移住や定住化が実施された後に出現したものであると報告している (Wenzel 1988)。彼は、また、ニンギフツク (ningiqtuq) と呼ばれるかつては拡大家族の成員間で行なわれていた食物分配

システムは、クライドリバーに住む540名のイヌイットに拡大適用されるようになってきたことを報告している。ウエンゼル (Wenzel 1991:100) は、食物分配の制度は、予測することが難しい狩猟と漁撈を補償する社会保険のような役目を果すのでコミュニティーの福祉に貢献するうえに、自活できない未亡人や身体障害者に食物を確実に供給することができるという機能を持っていると主張している。

また、ウエンゼルは、食物分配システムの持続と変化に関しても、クライドリバーのイヌイットの間では、イスマタック (Isumataq) と呼ばれる家族の長によって監督される拡大家族内での食物分配は現在でも実践されているが、ニンギフツックという食物分配システムのいくつかの局面は崩壊しつつあると指摘している (Wenzel 1991:132)。この変化は、ヨーロッパ経済共同体が1982年に商業のためのアザラシ皮の輸入を禁止したことによる直接の影響による。すなわちイヌイットは、取ったアザラシの毛皮を毛皮交易会社に売ることによって現金を獲得することができなくなり、ガソリンや弾薬を十分に購入することができなくなってしまい、以前のように生業活動を行なうことができなくなってきている。この結果、ハンターは、他者と分配するに十分なほどの肉を村に持ち帰ることができなくなってきているのである (Wenzel 1991:132)。すなわち以前のような頻度と数量規模での食物分配ができなくなってきているのである。さらに、教会が主催する村全体の共食、クリスマスや誕生日のプレゼント交換など新たな分配システムが出現していることを彼は指摘している (Wenzel 1991:132)。

ホルマンのコパー・イヌイットを調査しているコンドンは、先住民の協力や分配パターンの変化について、経済的な安定性が増したために賃金労働や生業活動の個人化が進み、世帯間の協同や分配の量が減少していると指摘している (Condon 1991:273)。一方、アラスカのネルソン島のユピックの社会生活を研究したフィエナップ＝リオードン (1983) は、現在行なわれているアザラシパーティーの際のプレゼントの交換などは、生と死、獲る側と獲られる側とのサイクリングや交換というイデオロギーを反映しており、食料の分配や交換については根本的な変化はみられないとの見解を披歴している。

以上、イヌイットやユピックをめぐる生業研究の動向と成果をまとめてみた。特に生業の研究は、極北民族の社会や文化の持続と変化を考える上で重要である。これら社会の経済発展に関する政策を策定する時には、人類学的研究の成果が大いに役立つという意味でもこれらの研究は重要である。

5. 検 討

本論文では、過去10年のうちに北米で行なわれたイヌイットやユッピックに関する文化人類学的な研究の動向と現状を見てきた。研究課題については、1977年までの研究に比べ、課題に多様性がさらに見られるようになるとともに、親族研究など伝統的な社会人類学的研究が下火になり、土地権をはじめとする先住民の諸権利の問題、生業を中心とする経済発展の問題、社会変動、教育、社会問題の解決など応用人類学的研究の数が増加してきたといえる。また、研究単位もこれまでの村落やネツリック・イヌイットやコパー・イヌイットのような地域社会集団ではなく、北西準州、ヌナビックやカナダ極北地域などより広い地域や行政単位が研究の単位となってきた。

また、研究課題としては、社会変動と生業の研究が中心的争点となってきたと思う。

古典的民族誌研究は、西欧社会と接触する以前のイヌイットやユッピックのいわゆる「伝統的な」社会関係と生業活動の再構成を目的としていた。そして調査の基本的な視点は、過酷な極北の自然環境の中で生き残るために独自の技術、社会組織やイデオロギーを開発し、使用してきた人々の生態的適応を強調するものであった。この視点は、現在にいたるまで、生業活動に関心のある極北人類学者の間では中心的なものであり続けてきた(Boas 1888; Mauss 1906; Spencer 1959; Heinrich 1963; Balikci 1964; Damas 1969; Laughlin 1968, 1980; Freeman 1974; Burch 1975; Kemp 1971; Wenzel 1981; Condon 1983; Smith 1991)。一般的に言って、イヌイットやユッピックの社会関係や生業活動は、極北の環境に適応するためにこれらの人々が創り出し、工夫を加えてきたと仮定されている。しかしながら、1950年代以降の社会変動研究は、生態学的要因よりも政治的要因や経済的要因が強調されはじめた。この背景には、現代のイヌイットやユッピックの社会変動は、生態的な要因ではなく政治経済的な要因によって引き起こされているという認識が人類学者の間で高まったことにあると言える。

1920年代末までに、北米大陸の極北地域に居住するイヌイットやユッピックは、経済的な観点からすれば毛皮交易にかなり依存をするようになってしまった。第二次世界大戦後には、カナダや米国の政府が行政や経済発展の理由で極北先住民社会に積極的に介入した。1960年代の終わりまでには、ほとんどすべてのイヌイットやユッピックは村落で定住生活を開始したのであった。多数の人類学研究が、1950年代から1960年代にかけて多数の極北地域の村落で行なわれたが、これらの研究の中心的課題は、伝統社会の再構成、社会文化変動や文化変容の問題であった。ところが、1980年頃を境にして、その後では社会文化変動研究にはっきりした違いがあることが分る。1980年頃以前に出版された社会文化変動研究は、先住民の社会や文化の変化している諸側面を強

調する傾向が明確に見られる。一方、1980年頃以降に出版された研究では、変化を強調する研究も存在するものの、社会や文化の持続に焦点を合わせたり、強調するものが出てきた。

1980年以降の出版物に限定すれば、クラウスナーとフォークス (Klausner and Foulks 1982) やプレテス (Pretes 1988) は、社会や文化の変化の側面を強調しており、分析の枠組みとして従属理論や世界システム理論を援用している。フィエナップ＝リオードン (Fienup - Riordan 1983) やナタル (Nuttall 1992) らは、社会や文化の持続や連続性の側面を強調しているが、生業活動やそのイデオロギーに関心をよせていた。クラウスナーらは、アラスカのイヌピアート社会やカナダのイヌイット社会の統合性が崩れたり、より大きな政治経済システムに取り込まれることにより崩壊しつつあることを指摘しているのに対し、フィエナップ＝リオードンらは、アラスカのユピックやグリーンアランドのカラリットの文化的連続性を強調している。これら2つのタイプの社会文化研究は読者に対し現在の極北社会の変化と現状について2つの全く異なるイメージを与えているといえよう。

クラウスナーら (1982) が指摘しているように、極北の諸社会がより大きな世界経済システムや国家システムに飲み込まれることによって変化を被っていることは事実であろう。しかし、国家や世界経済システムへの極北民の政治経済的な依存化の増大が、彼らの生活様式を一方向的に規定したり、方向づけていると結論をくだすことはできない。また、フィエナップ＝リオードン (1983) が主張しているように、ユピックの間では、生業のイデオロギーが維持され、生業活動自体も社会経済的な観点からすればその活力を依然として保ち続けていることも事実であろう。しかし、この人々の社会が、外的な政治的要因や経済的要因に関係しても深刻な変化を被ることが全くなかったとは言えない。

バリクシ (Balikci 1986:127) は、この2つの研究についての書評の中で、これらの2つの異なる結論は、極北社会における2つの異なる現実に由来するのではなく、むしろ研究者が援用している異なる理論的志向ないしアプローチの違いを反映していると適切に指摘している。極北社会の現在進行中の社会文化変動をより現実 に即して記述し、よりよく理解するためには、研究対象の村落社会を取り巻く外部社会との政治経済関係に特に注意を払いつつ、社会経済的プラクティに焦点をあて、先住民のコミュニティーの社会と文化を研究する必要があると筆者は主張したい。

アラスカの先住民社会についてなされた一連の研究 (e.g. Ellanna and Sherrod 1984; Langdon 1991)、カナダ極北地域のウエンゼルの研究 (Wenzel 1991) やグリーンランドでのナタル (Nuttall 1992) の研究が示しているように、イヌイットやユピックは、貨幣＝生

業混交経済下においても生業活動を続け、この活動を通して社会関係を維持し、再生産しているのである。我々が、現在の極北先住民社会の現状と社会変動を理解するためには、所与の村落における生業活動とそれに深く係わる社会関係に注目する必要があると思う。

現在、極北人類学では研究課題が専門化し特殊化する傾向が顕著である。これは研究の発展していることを示しているが、単なる専門化や特殊化の進展は研究対象の社会や文化の全体性の把握の欠如を招来し、「木を見て森を見ず」ということに陥りかねない。文化人類学の最大の長所は、フィールドワークに基づき対象社会の生活をできるだけ全体として理解しようとするところであると思う。現在の極北人類学に欠けていることは、極北社会を取り込みつつあるより大きな政治経済システムとの関係や影響に十分な注意を払いながらフィールドワークに基づいて極北民の社会生活全体に関する現代民族誌を作成することであると主張したい。また、極北地域における社会変動や持続の特質や地域的多様性と類似性を把握するためには、社会文化変化のプロセスや現状に関して汎極北的な比較研究を行なうことが必要であると思う。

(謝辞)

筆者は、平成5年度文部省在外研究員として平成5年8月20日より平成6年3月31日まで、カナダのハル市のカナダ文明博物館 (Canadian Museum of Civilization)、モントリオール市にあるマギル大学人類学部 (Dept. of Anthropology at McGill University) および米国ワシントン市のスミソニアン協会自然史博物館人類学部極北研究センター (Arctic Studies Center, Dept. of Anthropology, Museum of Natural History at Smithsonian Institution) にて研究に従事する機会を得た。本論文は、この期間の研究成果の一部をまとめたものである。この在外研究中に次の方々からご助力や教えを頂戴した。記して感謝の微意を表わすものである。Mr. J. Dyer, Drs. G. Wenzel, L. Müller-Wille, F. Ikawa-Smith, J. Savelle, C. Scott, C. Lambert, D. Clément, J.G. Taylor, W. Fithzugh, I. Krupnik, Ms. R. Stano、羽生淳子女史および出利業浩司氏。また、在外研究中に長女真代が郷里の高知で誕生した。この論文を長女真代と妻美和に捧げたい。なお、この論文は、平成6年度北海道民族学会第一回研究会 (平成6年5月21日、北海道大学古川講堂) において発表した原稿に手を入れたものである。本論文を完成させるにあたり、スチュアートヘンリ先生からご批判、コメントを頂いた。記して感謝する次第である。

注

(注1)イヌイットやユピックは、これまでエスキモーという総称で一括されて取り扱われてきた。また筆者は、これまでユイト (Yuit) と言う名称を用いてきたが、北米での人類学者の用法に従い、ユピック (Yup'ik) という民族名称を用いることをお断りしておきたい。ユピックという日本語表記については、宮岡 (1987) に従った。

(注2) 1983年までに出版された主要著作についての文献目録については、Arctic Institute of North America (1953-1971)、Murdock and O'Leary (1975)、Burch (1977, 1979)、岸上 (1984) や Damas, ed (1984) がある。また、研究や理論の動向に関する論考には、Damas (1975)、Wenzel (1984)、Balikci (1989)、Riches (1990)、岸上 (1990) などがある。

(注3) 最適採資源理論 (optimal foraging theory) の概要と問題点については、Foley (1985) や Durham (1981) を参照されたい。

(注4) 世界の極北関係の研究所や学会に関する情報は、Burch (1993) を参照されたい。

(注5) G. テイラーから直接聞いた話によると、ホークスはラブラドルで実質的なフィールドワークをしておらず、彼のアラスカでの体験と知識をラブラドルのイヌイットに投影することによって、民族誌を書き上げたらしいと言う。

(注6) この巨視的な視点は、すでに1970年代に Brody (1975:31-32) によって採用されている。

(注7) アラスカ先住民諸権益請求措置法の解説および抄訳については、小谷 (1990:199-234) を参照されたい。

(注8) この見解は、すでにダックス (Dacks 1981) によって採用されている。

(注9) コパー・イヌイットの土地利用パタンの歴史的变化を研究したコリニョン (Collignon 1993) は、1970年代後半まで、大きな変化はなかったことを指摘している。

(注10) 青年層のイヌイットの行動に関する研究は増加しつつある (例えば Condon 1987)。マギル大学の大学院生のE. ローリング (Loring) はG. ウエンゼル (Wenzel) 博士の指導のもとカナダのパフィン島のクライドリバーの若者のハンターの生業活動を現在調査中である。

(注11) カナダの中央極北イヌイットの食物分配を研究したダマス (Damas 1972:237) も同様な事例を指摘している。

引用文献

- Arctic Institute of North America.
1953-1971 *Arctic Bibliography*.
- Asch, M.
1977 The Dene Economy
In Watkins, M. ed., pp. 47 - 61., *Dene Nation: The Colony Within*.
Toronto: University of Toronto Press.
- Balikci, A.
1960 Some Acculturative Trends Among the Eastern Canadian Eskimos.
Anthropologica. n.s. Vol.2(2):139 - 153.
1964 Development of Basic Socioeconomic Units in Two Eskimo
Communities. Anthropological Series 69. *National Museum of
Canada Bulletin* 202. Ottawa.
1970 *The Netsilik Eskimo*. Garden City, N.Y.: Natural History Press.
1986 The Alaskan Eskimos at the Crossroads.
Reviews in Anthropology. vol.13(1):120 - 127
1989 Ethnography and Theory in the Canadian Arctic.
Études/Inuit/Studies. Vol.13(2):103 - 111.
- Bartels, D. and A. Bartles.
1983 Affirmative Action Education Programs for Siberian Native
People.
Canadian Journal of Native Education. Vol.11(2):27 - 53.
1986 Soviet Policy Toward Siberian Native People: Integration,
Assimilation or Russification.
Culture. Vol.6(2):15 - 31.
1989 Language Education Programs for Aboriginal Peoples of the
Siberian North: The Soviet Experience.
Canadian Journal of Native Education. Vol.16(1):24 - 36.
- Befu, H.
1964 Eskimo Systems of Kinship Terms: Their Diversity and
Uniformity. *Arctic Anthropology*. Vol.2(1):84 - 98.
- Ben - Dor, S.
1966 *Makkovik: Eskimos and Settlers in a Labrador Community*.

St. John's Newf.:Memorial University of Newfoundland,
Institute of Social and Economic Research.

Berger, T. R.

- 1977 *Northern Frontier, Northern Homeland: The Report of the Mackenzie Valley Pipeline Inquiry.*
Ottawa:Supply and Services Canada.

Birket - Smith, K.

- 1929 *The Caribou Eskimos: Material and Social Life and Their Cultural Position. Report of the Fifth Thule Expedition 1921 - 1924. Vol.5(1 - 2).* Copenhagen.

Black, L.

- 1983 Eskimo Motifs in Aleut Art and Folklore.
Études/Inuit/Studies. Vol.7(1):3 - 23.
- 1987 Whaling in the Aleutians.
Études/Inuit/Studies. Vol.11(2):7 - 50.

Blaisel, X. and J. Arnakak

- 1993 Trajet Rituel: du harponnage à la naissance dans le mythe d'Arnaqtaaqtuq. *Études/Inuit/Studies.* Vol.17(1):15 - 46.

Boas, F.

- 1888 The Central Eskimo. *Annual Reports of the Bureau of American Ethnology.* Vol.6: 390 - 669.

Bodenhorn, B.

- 1989 The Animals Come to Me, They Know I share: Inupiaq Kinship, Changing Economic realtions and Enduring World Views on Alaska's North Slope.
Ph.D. thesis, Cambridge Univeristy.
- 1990 I'm Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender.
Études/Inuit/Studies. Vol.14(1 - 2):55 - 74.

Brice - Bennett, C. ed.

- 1977 *Our Footprints are Everywhere: Inuit Land Use and Occupancy in Labrador.* Nain: Labrador Inuit Association.

Briggs, J.

- 1970 *Never in Anger: Portrait of an Eskimo Family.*
Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 1983 Le modele traditionnel d'éducation chez les Inuit.
Recherches Amérindiennes au Québec. Vol.8(1):13- 26.
- 1985 Socialization, Family Conflicts and Responses to Culture
Change Among Canadian Inuit.
Arctic Medical Research. Vol.40:40- 52.
- 1991 Expecting the Unexpected: Canadian Inuit Training for an
Experimental Life - style.
Ethos. Vol.19(3):259- 287.

Brody, H.

- 1975 *The People's Land: Eskimos and Whites in the Eastern Arctic.*
New York: Penguin Books.
- 1978 Ecology, Politics and Change: The Case of the Eskimo.
Development and Change. Vol. 9: 21-40.

Burch, Jr. E.

- 1966 Authority, Aid and Affection: The Structure of Eskimo Kin
Relationships. Unpublished Ph.D. thesis, Dept. of Anthropology.
University of Chicago.
- 1970 The Eskimo Trading Partnership in North Alaska.
Anthropological Papers of the University of Alaska. Vol.15(1):49
- 80.
- 1975 *Eskimo Kinsmen: Changing Family Relationships in Northwest
Alaska.* St. Paul: West Publishing Co.
- 1977 The Ethnography of Northern North America: An Overview of
Current Research.
Paper prepared for the conference on the peopling of the
new world. Washington, D.C.
- 1978 Caribou Eskimo Origins.
Arctic Anthropology. Vol.15(1):1- 35.
- 1979 The Ethnography of Northern North America: A Guide to Recent
Research. *Arctic Anthropology.* Vol.16:62- 146.
- 1980 Traditional Eskimo Societies in Northwest Alaska.

北米におけるイヌイト及びユピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

- In Kotani, Y. and W.B. Workman eds. pp.253- 304. *Alaska Native Culture and History*. Osaka:National Museum of Ethnology.
- 1984 Kotzebue Sound Eskimo.
In Damas, D. ed., *The Handbook of North America Indians, Arctic.*, Vol.5. pp.303- 319. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- 1985 Subsistence Production in Kivalina, Alaska: A Twenty Year Perspective. Alaska., Dept. of Fish and Game, Division of Subsistence, *Technical Paper #128*.
- 1986a The Eskaleuts:A Regional Overview.
In Morrison, R.B. and C. R. Wilson (eds.) *Native Peoples:The Canadian Experience*. pp.98- 106.,Toronto:McClelland and Stewart Limited.
- 1986b The Caribou Inuit.
In Morrison, R.B. and C. Wilson eds., pp.106- 133. *Native Peoples:The Canadian Experience*. Toronto: McClelland and Stewart Limited.
- 1988a *The Eskimos*. Norman: University of Oklahoma Press.
スチュアートヘンリ訳『エスキモーの民族誌』原書房(訳1991)
- 1988b Modes of Exchange in North- west Alaska.
In Ingold, T. et. al. eds. pp.95- 109., *Hunters and Gatherers 2: Property, Power and Ideology*. Oxford:Berg.
- 1988c War and Trade.
Fitzhugh, W.W. and A. Crowell,eds. pp.227- 240.,*Crossroads of Continents.*, Washington, D.C.:Smithsonian Institution.
- 1988d Kund Rasmussen and "Original" Inland Eskimos of Southern Keewatin. *Études/Inuit/Studies*. Vol.12(1):81- 100.
- 1988e The End of the Trail:The Work of the Fifth Thule Expedition in Alaska. *Études/Inuit/Studies*. Vol.12(1/2):151- 170.
- 1991 From Skeptic to Believer:The Making of an Oral Historian.
Alaska History. Vol.6(1):1- 16.
- 1993 The Organization of Arctic Social Sciences.
In Dorais, J- J. and L. Müller- Wille eds. pp.31- 114.

- Social Sciences in the North*. Ste - Foy, P.Q.:International Arctic Social Sciences Association.
- 1994 The Futyre of Hunter - Gatherer Research.
In Burch, Jr.,E. and L.J. Ellanna eds, pp.441 - 455.
Key Issues in Hunter - Gatherer Research. Oxford:Berg.
- Cashdan, E.
1985 Coping With Risk: Reciprocity among the Basarwa of Northern Botswana. *Man*. Vol.20:454 - 474.
- Chance, N.
1990 *The Inupiat and Arctic Alaska: An Ethnography of Development*. Chicago:Holt, Rinehart and Winston.
- Choinière,R. et N. Robitaille.
1993 La Mortalité des Inuit du Nouveau - Québec au Milieu des Années Quatre - Vings.
Études/Inuit/Studies. Vol.17(1):91 - 102.
- Cohen, A.P.
1985 *The Symbolic Construction of Community*. London:Tavistock.
- Collignon, B.
1993 The Variations of a Land Use Pattern:Seasonal Movements and Cultural Change Among the Copper Inuit.
Études/Inuit/Studies. Vol.17(1):71 - 89.
- Condon, R.
1983 *Inuit Behavior and Seasonal Change in the Canadian Arctic*. Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press.
1987 *Inuit Youth:Growth and Change in the Canadian Arctic*. New Brunswick:Rutgers University Press.
1990 The Rise of Adolescence: Social Change and Life Stage Dilemmas in the Central Canadian Arctic.
Human Organization. Vol.49(3):266 - 279.
1991 Birth Seasonality, Photoperiod, and Social Change in the Central Canadian Arctic.
Human Ecology. Vol.19(3):287 - 321.
- Condon, R.G. and P.R. Stern

- 1993 Gender - Role Preference, Gender Identity, and Gender Socialization among Contemporary Inuit Youth. *Ethos*. Vol.21(4):384 - 416.
- Dacks, G.
- 1981 *A Choice of Futures: Politics in the Canadian North*. Toronto: Methuen.
- Damas, D.
- 1963 Igluligmiut Kinship and Local Groupings: A Structural Approach. Anthropological Series 64, *National Museum of Canada Bulletin* 196. Ottawa.
- 1969a Environment, History, and Central Eskimo Society. In Damas, D. ed., pp.40 - 64. Ecological Essays. Anthropological Series 86, *National Museum of Canada Bulletin* 230. Ottawa.
- 1969b Characteristics of Central Eskimo Band Structure. In Damas, D. ed. Contributions to Anthropology: Band Societies. Anthropological Series 84, *National Museum of Canada Bulletin* 228. Ottawa.
- 1972 Central Eskimo Systems of Food Sharing. *Ethnology*. Vol.11:220 - 240.
- 1975 Social Anthropology of the Central Eskimo. *Canadian Review of Sociology and Anthropology*. Vol.12(3):252 - 266.
- 1984 Introduction. In Damas, D. ed. pp.1 - 8. *Handbook of North American Indians*, Vol.5. Arctic. Washington, DC: Smithsonian Institution.
- 1988 The Contact - Traditional Horizon of the Central Arctic: Reassessment of a Concept and Reexamination of an Era. *Arctic Anthropology*. Vol.25(2):101 - 138.
- Damas, D., ed.
- 1984 *Handbook of North American Indians*. Vol.5. Arctic. Washington, DC: Smithsonian Institution.
- Denbow, J.

- 1986 A New Look at the Later Prehistory of the Kalahari.
Journal of African History. Vol.27:3- 28.
- Dorais, J- J.
- 1985 Regressive Consonant Assimilation in Eastern Inuktitut:
Toward a Sociolinguistic Approach.
International Journal of American Linguistics.
Vol.51(4):390- 393.
- 1990 *Inuit Uqausiqatigiit: Inuit Languages and Dialects*.
Iqaluit, N.W.T.:Arctic College, Nunatta Campus.
- 1992 La Situation Linguistique Dans L'Arctique.
Études/Inuit/Studies. Vol.16(1- 2):237- 255.
- 1993 *From Magic Words to Word Processing: A History of the Inuit
Language*.
Iqaluit, N.W.T.:Arctic College, Nunatta Campus.
- Dufour, R.
- 1989 Pretez - nous L'oreille: Anthropologie de l'otite moyenne chez
les Inuit.
Ph.D. Thesis, Université Laval.
- Duhaime, G.
- 1983 La Sédentarisation au Nouveau - Québec Inuit.
Études Inuit Studies. Vol.7(2):25- 52.
- 1987 Ni Chien, Ni Loup: L'économie, l'État et les Inuit du Québec
Arctique.
Ph.D. Thesis., Université Laval.
- 1991 Revenu Personnel, Destin Collectif: La structure du revenu
des Inuit de l'Arctique du Québec 1953- 1983.
Canadian Ethnic Studies. Vol.23(1):21- 39.
- 1992 La Chasseur et le Minotaure: Ininéraire de l'autonomie
politique au Nunavik.
Études/Inuit/Studies. Vol.16(1- 2):149- 177.
- Durham, W.H.
- 1981 Overview: Optimal Foraging Analysis in Human Ecology.
In Winterhalder, B. and E. Smith eds, pp.221- 228.

*Hunter - Gatherer Foraging Strategies: Ethnographic and
Archaeological Analyses.* Chicago: University of Chicago Press.

Ellanna, L.J.

- 1983 Bering Strait Insular Eskimo: A Diachronic Study of Ecology
and Population Structure.
Ph.D.thesis., The University of Connecticut.
- 1988a Skin Boats and Walrus Hunters of Bering Strait.
Arctic Anthropology. Vol.25(1):107 - 119.
- 1988b Demography and Social Organization as Factors in Subsistence
Production in Four Eskimo Communities.
Research in Economic Anthropology. Vol. 10:73 - 87.

Ellanna, L.J. and G. K. Sherrod

- 1984 The Role of Kinship Linkages in Subsistence Production.
Alaska Department of Fish and Game, Division of Subsistence.
Technical Paper #100.

Ellanna, L. J. and P.C. Wheeler

- 1989 Wetlands and Subsistence - based Economies in Alaska, USA.
Arctic and Alpine Research. Vol.21(4):239 - 240.

Feit, H.

- 1993 The Enduring Pursuit: Land, Time, and Social Relationships
in Anthropological Models of Hunter - Gatherers and in
Subarctic Hunters' Images.
In Burch, Jr., E.S. and L.J. Ellanna. pp.421 - 439. *Key Issues
In Hunter - Gatherer Research.* Oxford: Berg.

Fienup - Riordan, A.

- 1983 *The Nelson Island Eskimo.*
Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- 1986a *When Our Bad Season Comes: A Cultural Account of Subsistence
Harvesting and Harvest Disruption on the Yukon Delta.*
Aurora 1., Alaska Anthropological Association.
- 1986b The Real People: The Concept of Personhood Among the Yup'ik
Eskimos of Western Alaska.
Études/Inuit/Studies. Vol.10(1 - 2):261 - 270.

- 1987a Robert Redford, Apanuugpak, and the Intervention of Tradition. *Études/Inuit/Studies*. Vol.11(1):135-148.
- 1987b The Mask:The Eye of the Dance. *Arctic Anthropology*. Vol.24(2):40-55.
- 1990a *Eskimo Essays:Yup'ik Lives and How We See Them*. New Brunswick and London:Rutgers University Press.
- 1990b The Bird and the Bladder:The Cosmology of Central Yup'ik Seal Hunting. *Études/Inuit/Studies*. Vol.14(1-2):23-38.
- Foley, R.
- 1985 Optimality Theory in Anthropology. *Man(N.S.)* Vol.20:222-242.
- Frank, A. G.
- 1971 *Capitalism and Underdevelopment in Latin America*. New York:Penguin.
- Freeman, M.M.R.
- 1964 Observations on the Kayak - complex, Belcher Islands, N.W.T. Anthropological Series 62. *National Museum of Canada Bulletin*. No.194. pp.56-91. Ottawa.
- 1967 An Ecological Study of Mobility and Settlement Patterns Among the Belcher Island Eskimo. *Arctic*. Vol.20(3):154-175.
- 1969-70 Studies in Maritime Hunting. I:Ecologic and Technologic Restraints on Walrus Hunting, Southampton Island, N.W.T. *Folk* Vol.11-12:155-171.
- 1984 Contemporary Inuit Exploitation of the Sea-ice Environment. In Wilkinson, P. ed. "*Sikumut:The People Who Use The Sea Ice*" pp.73-96. Ottawa: Canadian Arctic Resources Committee.
- 1986 Renewable Resources, Economics and Native Communities. In *Native People and Renewable Resource Management (The 1986 Symposium of the Alberta Society of Professional Biologists)*, pp.29-37., Edomonton, Alberta: Alberta Society of Professional Biologists.
- 1988a Environment, Society and Health:Quality of Life Issues in

- the Contemporary North.
Arctic Medical Research. Vol.47(suppl.1.):53-59.
- 1988b Tradition and Change: Problem and Persistence in the Inuit Diet.
In de Garine, I. and G.A. Harrison eds. pp.150-169. *Coping with Uncertainty in Food Supply*. Oxford: Clarendon Press.
- 1989 The Alaska Eskimo Whaling Commission: Successful Co-Management under Extreme Conditions. In Pinkerton, E. ed. pp.137-153. *Co-Operative Management of Local Fisheries*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Freeman, M.M.R., ed.
1976 *Report: Inuit Land Use and Occupancy Project*. 3 vols.
Ottawa: Department of Indian and Northern Affairs.
- Freeman, M.M.R., E.E. Wein and D.E. Keith.
1992 *Recovering Rights: Bowhead Whales and Inuvialuit Subsistence in the Western Canadian Arctic*.
Canadian Circumpolar Institute, Edmonton and Fisheries Joint Management Committee, Studies on Whaling., Number 2.
- Graburn, N.H.H.
1960 The Social Organization of an Eskimo Community: Sugluk, P.Q.
Unpublished MA Thesis in Anthropology, McGill University.
- 1964 *Taqagmiut Eskimo Kinship Terminology*.
(NCRC-64-1), Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources, Northern Co-ordination and Research Center.
- 1969 *Eskimos Without Igloos: Social and Economic Development in Sugluk*. Boston: Little, Brown.
- 1971 Traditional Economic Institutions and the Acculturation of the Canadian Eskimos.
In Dalton, G. ed. pp.107-121. *Studies in Economic Anthropology*. Washington, D.C.: American Anthropological Association.
- 1986a White Evaluation of the Quality of Inuit Sculpture.
Études/Inuit/Studies. Vol.10(1-2):271-283.

- 1986b Inuit Art and Canadian Nationalism.
Inuit Art Quarterly. Vol.1(3).
- 1993 The Fourth World and Fourth World Art.
In The Canadian Museum of Civilization (ed.), pp.1 - 26.,
In *the Shadow of the Sun*. Canadian Ethnology Service Mercury
Series Paper 124.
- Gubser, N. J.
1965 *The Nunamiut Eskimo: Hunters of Caribou*.
New Haven, Conn.: Yale University Press.
- Guemple, L.
1965 Saunik: Name Sharing As a Factor Governing Eskimo Kinship
Terms. *Ethnology*. Vol.4(3):323 - 335.
- 1966 Kinship Reckoning Among the Belcher Island Eskimos.
Unpublished Ph.D. thesis in Anthropology, University of
Chicago.
- 1969 The Eskimo Ritual Sponsor: A Problem in the Fusion of
Semantic Domains. *Ethnology*. Vol.8(4):468 - 483.
- 1979 Inuit Adoption.
Ethnology Service Paper #47. Ottawa: National Museum of Man.
- 1986 Men and Women, Husbands and Wives: The Role of Gender in
Traditional Inuit Society.
Études/Inuit/Studies. Vol.10(1 - 2):9 - 24.
- 1988 Teaching Social Relations to Inuit Children.
In Ingold, T. et al eds. pp.131 - 149. *Hunters and Gatherers 2*
: *Property, Power and Ideology*. Oxford: Berg.
- Guemple, L. ed.
1972 Alliance in Eskimo Society. (*Proceedings of the American
Ethnological Society for 1971*. Suppl.) Seattle: University of
Washington Press.
- Harp, E. Jr.
1962 The Culture History of the Central Barren Grounds.
In *Prehistoric Cultural Relations Between the Arctic and
Temperate Zones of North America*. ed. by Campbell, J. M., pp.

69-75. Arctic Institute of North America Technical Paper No.
11. Montreal.

Hawkes, E. W.

1916 The Labrador Eskimo. Canada. Department of Mines. *Geological
Survey Memoir 91*. Anthropological Series 14. Ottawa.

Headland, T.N. and C. A. Reid

1989 Hunter - Gatherers and Their Neighbours from Prehistory to the
Present.
Current Anthropology. Vol.30(1):43-66.

Heinrich, A.

1963 Eskimo - type Kinship and Eskimo Kinship: An Evaluation and a
Provisional Model for Presenting Data Pertaining to Inupiaq
Kinship Systems.
Unpublished Ph.D. thesis in Anthropology, University of
Washington.

Honigmann, J.

1962 Social Networks in Great Whale River: Notes on an Eskimo,
Montagnais - Naskapi, and Euro - Canadian Community.
Anthropological Series 54, *National Museum of Canada
Bulletin* 178.

Honigmann, J. and I. Honigmann

1965 *Eskimo Townsmen*.
Ottawa: Saint Paul University, Canadian Research Centre for
Anthropology.
1970 *Arctic Townsmen: Ethnic Backgrounds and Modernization*.
Ottawa: Saint Paul University, Canadian Research Centre for
Anthropology.

Hughes, C.C.

1960 *An Eskimo Village in the Modern World*.
Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

Ingold, T.

1980 *Hunters, Pastoralists and Ranchers*.
Cambridge: Cambridge University Press.

Jansen, W.H.

- 1979 Eskimo Economics: An Aspect of Culture Change at Rankin Inlet.
Canadian Ethnology Service Paper No.46. Ottawa: National
Museum of Man.

Jenness, D.

- 1922 The Life of the Copper Eskimos.
Report of the Canadian Arctic Expedition, 1913-18.
Vol.12(A). Ottawa.
- 1928 *The People of the Twilight.* New York: Macmillan.

Jorgensen, J.

- 1990 *Oil Age Eskimos.*
Berkeley: University of California Press.

Kemp, W.

- 1971 The Flow of Energy in a Hunting Society.
Scientific American. Vol.225(3):105-115.

Kennedy, J.

- 1981 *Holding the Line: Ethnic Boundaries in a Northern Labrador
Community.*
St. Johns: Memorial University of Newfoundland, Institute of
Social and Economic Research.

Kishigami, N.(岸上伸啓)

- 1984 エスキモーに関する民族学的研究の最近の動向について
日本民族学会第23回研究大会 国立民族学博物館 5月25日
A Bibliography of Ethnological Studies On The Inuit
between 1977 and 1983. The Data Prepared for the Annual
Meeting of Japanese Society of Ethnology at National Museum of
Ethnology, Osaka.
- 1990 イヌイト社会人類学の諸問題
『史観』第122冊 pp.73-91.
- 1994a A Preliminary Bibliography of Inuit and Yupik Studies in
North America: Socio-Cultural Anthropology, 1983-1993.
Unpublished Manuscript. Hokkaido University of Education.
- 1994b Extended Family and Food Sharing Practices among the

北米におけるイヌイト及びユピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

Contemporary Netsilik Inuit : A Case Study of Pelly Bay.

Paper read at the 9th Inuit Studies Conference.

Arctic College, Nunatta Campus, Iqaluit, NWT, Canada

Klausener, S.Z. and E.F. Foulks

1982 *Eskimo Capitalists: Oil, Politics, and Alcohol.*

Totowa, N.J.: Allanheld, Osmun Publishers.

Kleinfeld, J., J. Kruse and R. Travis.

1983 Inupiat Participation in the Wage Economy: Effects of
Culturally Adapted Jobs.

Arctic Anthropology. Vol.20(1):1 - 21.

Kotani, Y. (小谷凱宣)

1990 アラスカ原住民諸要求解決法 (ANCSA) 抄訳

小谷凱宣編 pp.199 - 234. 『北方諸民族に関する比較研究』

名古屋大学教養部

Krupnik, I.

1985a The Male - Female Ratio in Certain Traditional Populations of
the Siberian Arctic.

Études/Inuit/Studies. Vol.9(1):115 - 140.

1985b Le Chasseur Traditionnel dans les Ecosystemes du Subarctique
(l'exemple des Esquimaux asiatiques).

Inter - Nord. Vol.17:105 - 110.

1987 The Bowhead vs. the Gray whale in Chukotkan Aboriginal
Whaling. *Arctic.* Vol.40(1):16 - 32.

1988 Asiatic Eskimos and Marine Resources: A Case of Ecological
Pulsations or Equilibrium?

Arctic Anthropology. Vol.25(1):94 - 106.

1990 Fêtes Hivernales <<privées>> chez les eskimos Asiatiques.

Études/Inuit/Studies. Vol.14(1 - 2):159 - 168.

1991 Extinction of the Sirenikski Eskimo Language: 1895 - 1960.

Études/Inuit/Studies. Vol.15(2):3 - 22.

1993 *Arctic Adaptations: Native Whalers and Reindeer Herders of
Northern Eurasia.*

Hanover and London: University Press of New England.

Kruse, J.A.

- 1991 Alaska Inupiat Subsistence and Wage Employment Patterns: Understanding Individual Choice.
Arctic Anthropology. Vol.50(4):317- 326.

Langdon, S.J.

- 1991 The Integration of Cash and Subsistence in Southwest Alaskan Yup'ik Eskimo Communities.
In Peterson, N. and T. Matsuyama eds. *Cash, Commoditisation and Changing Foragers*. (Senri Ethnological Studies 30), pp.269- 291. Osaka, Japan: National Museum of Ethnology.

Langdon, S. and R. Worl

- 1981 Distribution and Exchange of Subsistence Resources in Alaska. Division of Subsistence, *Technical Paper* #55.
Alaska Department of Fish and Game.

Laughlin, W.S.

- 1968 Hunting: An Integrating Biobehavior System and Its Evolutionary Importance.
In Lee, R.B. and I. DeVore eds, pp.304- 320., *Man the Hunter*., Chicago:Aldine.
- 1980 *Aleuts:Survivors of the Bering Land Bridge*.
New York:Holt, Rinehart, and Winston.
スチュアートヘンリ訳『アリュート民族』六興出版(訳1986)

Lee, R. B.

- 1992 Art, Science, or Politics?:The Crisis in Hunter- Gatherer Studies.
American Anthropologists. Vol.94:31- 54.

Lonner, T. D.

- 1980 Subsistence as an Economic System in Alaska.
Division of Subsistence, *Technical Paper* #67.,
Anchorage:Alaska Department of Fish and Game.

Matthiasson, J.S.

- 1992 *Living on the Land:Change among the Inuit of Baffin Island*.
Peterborough, Ont.:Broadview Press, Ltd.

Mauss, M.

- 1904-05. Essai Sur Les Variations Saisonnières Des Sociétés Eskimos:
Étude de Morphologie Sociale. *L'année Sociologique* ix(1):39-132.
宮本卓也『エスキモー社会』未来社(訳1981)

McElroy, A.

- 1977 *Alternative in Modernization: Styles and Strategies in the
Acculturative Behavior of Baffin Island Inuit.*
New Haven: Human Relations Area Files, Inc.

Miyaoka, O (宮岡伯人)

- 1987 『エスキモー』岩波新書

Müller-Wille, L.

- 1987 *Gazetteer of Inuit Place Names in Nunavik.*
Inukjuaq, P.Q.: Avataq Cultural Institute.

Murdock, G.P. and T. J. O'Leary

- 1975 *Ethnographic Bibliography of North America. Vol.2 Arctic and
Subarctic.* New Haven: Human Relations Area Files Press.

Myers, F. R.

- 1988 *Critical Trends in the Study of Hunter-Gatherers.*
*Annual Review of Anthropology. Vol.17:*261-282.

Nattiez, J-J.

- 1985 *Le Disque de Musique Amérindienne: IV - Nouveaux Disques et
Caets de Musique Inuit.*
*Recherches Amérindiennes au Québec. Vol.14(4):*67-77.
1988 *La Danse à Tambour chez les Inuit à Igloodik (nord de la
Terre de Baffin).*
*Recherches Amérindiennes au Québec. Vol.18(4):*37-48.

Nuttall, M.

- 1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community and Development in
Northwest Greenland.*
Toronto: University of Toronto Press.

Oakes, J.

- 1988 *Caribou and Copper Inuit Skin Clothing Production.*
Ph.D. thesis, University of Manitoba.

O'Neil, J.D.

- 1984 Is It Cool to be an Eskimo?: A Study of Stress, Identity, Coping and Health Among Canadian Inuit Young Adult Men. Ph.D. thesis, University of California, Berkley with the Univeristy of California, San Francisco.
- 1986 The Politics of Health in the Fourth World. *Human Organization*. Vol.45(2):119 - 128.

Paine, R. ed.

- 1977 *The White Arctic: Anthropological Essays on Tutelage and Ethnicity*.
St. Johns: Memorial University of Newfoundland, Institute of Social and Economic Research.

Pretes, M.

- 1988 Underdevelopment in Two Norths: The Brazilian Amazon and the Canadian Arctic. *Arctic*. Vol.41(2):109 - 116.

Price, J. A.

- 1975 Sharing: The Integration of Intimate Economies. *Anthropologica*. Vol.17(1):3 - 27.

Reeves, R. R.

- 1993 The Commerce in Maktaq at Arctic Bay, Northern Baffin Island, NWT. *Arctic Anthropology*. Vol.30(1):79 - 93.

Riches, D.

- 1982 *Northern Nomadic Hunter - Gatherers: A Humanistic Approach*.
New York: Academic Press.
- 1990 The Force of Tradition in Eskimology.
In Fardon, R. ed. pp.71 - 89. *Localizing Strategies: Regional Traditions of Ethnographic Writing*. Edinburgh: Scottish Academic Press and Washington: Smithsonian Institution Press.

Rasmussen, K.

- 1929 Intellectual Culture of the Iglulik Eskimos.
Report of the Fifth Thule Expedition 1921 - 24.
Vol.7(1), Copenhagen.
- 1931 The Netsilik Eskimos: Social Life and Spiritual Culture.

北米におけるイヌイット及びユピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

- Report of the Fifth Thule Expedition 1921 - 24, Vol.8(1 - 2).*
Copenhagen.
- 1932 Intellectual Culture of the Copper Eskimos.
Report of the Fifth Thule Expedition 1921 - 24, Vol.8(1 - 2).
Copenhagen.
- Saladin d'Anglure, B.
- 1967 *L'Organisation Sociale Traditionnelle des Esquimaux de Kangirsujuaak (Nouveau - Québec).*
Université Laval. Centre d'Études Nordiques. Travaux Divers
17. Quebec.
- 1985 Du Projet <<Par.AD.I>> au Sexe des Anges:Notes et d'ebats
autour d'un <<troisième sexe>>.
Anthropologie et Sociétés, Vol.9(3):139 - 176.
- 1986 Du Foetus au Chamane: la construction d'un <troisième sexe>
inuit. *Études/Inuit/Studies. Vol.10(1 - 2):25 - 113.*
- 1990 Frère - lune (Taqiq), Soeur - soleil (Siqiniq) et L'intelligence
du Monde (Sila):Cosmologie inuit, cosmographie arctique et
espace - temps chamannique.
Études/Inuit/Studies. Vol.14(1 - 2):75 - 139.
- Richling, B.
- 1985a Isolation and Community Resettlement:a Labrador Example.
Culture. Vol.5(2):77 - 86.
- 1985b Stuck Up on a Rock: Resettlement and Community Development
in Hopedale, Labrador.
Human Organization. Vol.44(4):348 - 353.
- 1989 Very Serious Reflections:Inuit Dreams About Salvation And
Loss in 18th Century Labrador.
Ethnohistory. Vol.36(2):148 - 169.
- Sahlins, M.D.
- 1965 On the Sociology of Primitive Exchange.
In *The Relevance of Models for Social Anthropology, A.S.A.*
Monographs 1.,pp.139 - 236., London:Tavistock Publications.

Schrire, C.

- 1980 An Enquiry into the Evolutionary Status and Apparent Identity of San Hunter - Gatherers.
Human Ecology. Vol.8:9 - 32.
- Schrire, C. ed.
1984 *Past and Present in Hunter - Gatherer Studies*.
Orlando:Academic Press.
- Service, E. R.
1966 *The Hunters*. Englewood Cliffs, N.J.:Prentice - Hall, Inc.
- Smith, E.
1980 Evolutionary Ecology and the Analysis of Human Foraging Behavior:An Inuit Example from the East Coast of Hudson Bay.
Ph.D. thesis in Anthropology, Cornell University.
1991 *Inujjamiut Foraging Strategies: Evolutionary Ecology of an Arctic Hunting Economy*. New York:Aldine De Gruyter.
- Smith, T.G. and H. Wright.
1989 Economic Status and Role of Hunters in a Modern Inuit Village. *Polar Record*. Vol.25(153):93 - 98.
- Solway, J. S. and R. B. Lee
1990 Foragers, Genuine or Spurious?:Situating the Kalahari San in History. *Current Anthropology*. Vol.31(2):109 - 146.
- Spencer, R.
1959 The North Alaskan Eskimo:A Study in Ecology and Society.
Bureau of American Ethnology Bulletin 171. Washington.
- Statistics Canada.
1993 *Age and Sex* (1991 Census of Canada. Catalogue number 94 - 327).
Ottawa:Industry, Science and Technology Canada.
- Stefansson, V.
1913 *My Life with the Eskimo*.
New York: Macmillan.
1914 Prehistoric and Present Commerce Among the Arctic Coast Eskimo.
Canada. *Geological Survey Museum Bulletin* 6, Anthropological Series 3. Ottawa.

北米におけるイヌイト及びユッピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

Stewart, H.(スチュアートヘンリ)

1993 イヌイトか、エスキモーか：民族呼称の問題
『民族学研究』第58巻1号 pp.85-88.

印刷中 先住民族の自律とネオ・リージョナリズム：カナダのリージョナリズムと「北部」、つくば カナダ・セミナー報告集5号

Taylor, J. G.

1985 The Arctic Whale Cult in Labrador.
Études/Inuit/Studies. Vol.9(2):121-132.

1990 The Labrador Inuit Kashim (Ceremonial House) Complex.
Arctic Anthropology. Vol.27(2):51-67.

1993 Canicide in Labrador:Function and Meaning of an Inuit Killing Ritual. *Études/Inuit/Studies*. Vol.17(19):3-13.

Taylor, J. G. and H. Taylor.

1986 Labrador Inuit Summer Ceremonies.
Études/Inuit/Studies. Vol.10(1-2):233-244.

Taylor, W.E. Jr.

1965 The Fragments of Eskimo Prehistory.
The Beaver, Spring Issue, pp.4-17.

Trudel, F.

1991 Mais ils ont si peu de besoins: les inuit de la baie d'Ungava et la traite à Fort Chimo (1883-1884).
Anthropologie et Sociétés. Vol.15(1):89-124.

Usher, P.J.

1976 Evaluating Country Food in the Northern Native Economy.
Arctic. Vol.29(2):105-120.

Usher, P. and G. Wenzel

1988 Socio-Economic Aspects of Harvesting.
In Gigantes, C. ed. chapter 1. *Keeping on the Land*.
Ottawa:Canadian Arctic Resources Committee.

Wallerstein, I.

1974 *The Modern World System*. New York:Academic Press.

Wein, E.E. and M.M.R. Freeman.

1992 Inuvialuit Food Use and Food Preferences in Akulavik,

Northwest Territories, Canada.

Arctic Medical Research. Vol.51:159 - 172.

Wenzel, G.

- 1981 Clyde Inuit Adaptation and Ecology: The Organization of Subsistence.
Canada. National Museum of Man. Mercury Series. *Ethnology Service Paper 77*. Ottawa.
- 1984 L'écologie culturelle et les Inuit du Canada.
Études/Inuit/Studies. Vol.8(1):89 - 101.
- 1988 Inuit Subsistence at Clyde River, N.W.T., As A Social Relational Complex. Paper read at the Inuit Studies Conference at Copenhagen, Denmark.
- 1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*.
Toronto: University of Toronto Press.
- 1994 Ningiqtuq: Inuit Subsistence as a Social Relational Complex. Paper read at the 9th Inuit Studies Conference. Arctic College, Nunatta Campus, Iqaluit, NWT., Canada. 13, June. 1994

Wiessner, P.W.

- 1982 Risk, Reciprocity, and Social Influence on !Kung San Economics.
In Leacock, E. and R. Lee eds., pp.61 - 84., *Politics and History in Band Societies*, Cambridge: Cambridge University Press.

Williamson, R. G.

- 1985 The Eskimo Naming System, Social and Metaphysical Factors, and Forces of Change.
In *Honorem Evert Baudou*, Dept. of Anthropology, University of Umea., pp.37 - 47.
- 1988 Some Aspects of the History of the Eskimo Naming System: Name Change and Network Loss. *Folk*. Vol.30:245 - 264.

Willmott, W.E.

- 1961 *The Eskimo Community at Port Harrison, P.Q.*

北米におけるイヌイト及びユピックに関する
文化人類学的研究の最近の動向と現状について

(NCRC-61-1), Ottawa: Department of Northern Affairs and
National Resources, Northern Coordination and Research
Centre.

Wilmsen, E. N.

- 1983 The Ecology of Illusion: Anthropological Foraging in the
Kalahari. *Reviews in Anthropology*. Vol.10(1):9-20.

Wilmsen, E. N. and J. R. Denbow.

- 1990 Paradigmatic History of San-speaking Peoples and Current
Attempts at Revision.
Current Anthropology. Vol.31(5):489-524.

Woodburn, J.

- 1980 Hunters and Gatherers Today and Reconstruction of the Past.
In Gellner, E. ed., pp.95-117., *Soviet and Western Anthropology*. London:
Duckworth.

Wolfe, R.J. and R.J. Walker.

- 1987 Subsistence Economies in Alaska: Productivity, Geography,
and Development Impacts.
Arctic Anthropology. Vol.24(2):56-81

(北海道教育大学函館校)